

今様をうたう徳大寺実定の意味

——屋代本『平家物語』から——

はじめに

尾崎 勇

比叡山横川に隠棲して天台浄土教の礎を築いた源信の弟子の源算は、長元年間（二〇二八〜三七）に現在の京都市西京区大原野の山稜に別所をひらき善峯寺を建立、その北側に隣接する空閑地に庵室を設けて住んだ。西山の往生院（現在の三鮎寺）である。応保元年（一一六八）には観性が往生院の二世の院主となり、建久元年（一一九〇）入滅した。そして観性の弟子である慈円が第三世院主に就く。その一年後、慈円は徳大寺公衡と歌の贈答をしている。すなわち、慈円は、

建久二年三位中将夜宿月あかゝりければ申つかはす

むかしおもふ袖の露にそやとりける山路わけいる秋のよの月

（五六三二）

かへし忘却追可思出

中将出京之朝少生管弦なんとしてかへりてのち申つかはしたりし

あはれともをとにききこしひわのねにゆかりはいとと引心かな

（五六三三）

風わたる軒はの松のひひきにもしらへことのならをそおもふ

（五六三四）

とあるように五六三二番歌では、まず応保元年（一一六八）八月十一日に亡くなった公衡の父の徳大寺公能の在世

していた往時を思いだしたと日吉社に参籠して詠じた。以下の左注では慈円自身が、後に思い出して記録することわって、つづけて参籠を終えて帰京する公衡に慈円の許にいる稚児が管弦で送別したので、帰京後に公衡が慈円に対して五六三番歌で、稚児が情趣深い琵琶の演奏をすることをかねて噂で知っており、実際に帰京の途中まで同行して琵琶を弾いてくれたのは心に惹かれて今もなお鮮明に記憶していると詠じた歌を配している。この当該歌では、「いと」に「糸」を、「引く」に「弾く」を掛けて、「琵琶」は名残惜しいと詠じ、つづく公衡の五六三四番歌でも「琴」に「事」を掛けて、松風の響きから「琴」の語を連想している。元来、歌では松風の音と琴の音とは交差しながら別々の音であり、松を擬人化することはなかったのである。ところが、今様に、

月かげゆかしくは 南面に池を掘れ されぞ見る 琴の琴の音聞きたくは
北の岡の上に松を植ゑよ

〔梁塵秘抄〕三七九

とあるように松自体が琴を弾くとする発想に由来している。^{〔1〕} 慈円も、

建久四年十一月中旬ことに月くまなかりしに箏比巴ほうきやうなとうちてちことも遊しによみ
たりし

(2)

月も冬木のはも今はあらしより松のみひとりことしらふなり
と松が琴を弾くと詠じているので、今様の表現の影響をうけていたはずである。 (五七四六)

今様と徳大寺家と慈円とは如何なる関連があるのか。

建永元年(二二〇〇)三月に執政の「臣」の九条良経が頓死、承元元年(二二〇七)四月には良経の父の兼実が叙した。対立する撰閲家の近衛家が廟堂に幅を利かす時局になり、家運をはかなんだ慈円は、聖の蝟集する別所の西山に五ヶ年に亘って隠棲しつづける日々に、

山里にいかに契をむすひてか住むはうれしく見ぬは恋しき
(三〇一四)

と詠じてもいる。世俗の仕来りや煩雑さのない空間であるから、人の訪れがないと人が恋しくなると戯れている。^{〔2〕} 当該歌には今様に通じる「あそび心」が露呈しているであろう。後述するように、西山で治承四年(一一八〇)

四月に崇徳院の遺児の元性と『古今集』を校合した寂超は、すでに承安四年（一二七四）から翌年にかけて『今鏡』を著していた。その『今鏡』（すべらぎの下・第三「天内わたり」）には、

弓矢などいふ物、あらはに持ちたる者やありし、物に入れ隠してぞ、大路を歩きける。都の大路をも鏡のごとく磨きたてて、つゆきたなげなる所もなかりけり。世の末ともなく、かく治れる世の中、いとめでたかるべし。

とあるので、保元の乱後の新造された内裏の周辺で整齐と闊歩している武士を好感を持つて寂超は捉えていたのである。この寂超の視座は、頼朝の上洛した事象を『愚管抄』のなかで、

頼朝將軍ハ三月四日又京上シテアリケリ。供養ノ日東大寺ニマイリテ、武士等ウチマキテアリケル。大雨ニテ有ケルニ、武士等ハレハ雨ニヌル、トダニ思ハヌケシキニテ、ヒシトシテ居カタマリタリケルコソ、中時く物ミシレラン人ノ為ニハヲドロカシキ程ノ事ナリケレ。

（巻六——二八〇ページ）

と慈円が叙述したのとほぼ同じであるのは一目瞭然であろう。承元三年（一二〇九）六月に『慈鎮和尚夢想記』を草し、王法に参入する武將頼朝を道理と西山で頓悟したことからもあつた（後述）。

『今鏡』（弁聞 第十一「作り物語の行方」）には『源氏物語』を書き著した罪で紫式部は地獄に墮ちたとする説に反論して、寂超は、

唐土に白樂天と申したる人は、七十の巻物をつくりて、詞をいろへ、譬へをとりて、人の心をすすめ給ふなど聞え給ふも、文殊の化身とこそは申すめれ。（中略）もの心をわきまへ、悟りの道に向ひて、仏の御法を広むる種として、あらきことばも、なよびたることばも、第一義とかにもかへし入れむは、仏の御ころざしなるべし。かくは申せども、濁りに染まぬ法の御言ならねば、露霜と結びおき給へる言の葉もおぼく侍らむ。法の朝日によせて、たれもたれも情多くおはしまさむ人は、もてあそばせ給はむにつけても、心に染めておぼさんによりても、とぶらひ聞え給はむとぞ、いとど深き契りなるべき、（五九一—九四ページ）としており、詩を通じて人を仏道にすすめた白樂天は文殊菩薩の化身であり、紫式部が『源氏物語』を書き著し

ていったのは仏法を広める機縁なのであるから、物語の多様な言葉もこの上ない仏の心になつていと弁明する。そうとはいえ、『源氏物語』そのものは仏典ではなく、はかない言葉もあるが、「朝日」のような仏典に心をかたむければ、情趣を解する人ならば、いよいよ仏縁を契ることになるはずと揚言することになる。この寂超の言説は、後年、慈円が『文集百首』の跋文で「樂天者文珠之化身也」と刻み、『詠百首和歌 法門妙經八卷之中取百句』の序文に「今以^二僿言^一深^三法輪^一、雖^レ似^二狂言^一又通^二実道^一。」として僿き言葉も衆生の迷いを破砕し、狂言綺語は悟りにつながると考えに通じている。また施線にある衆生の無明を明るく照らす比喻としている「朝日」の言辞も、西山で慈円が詠じた「山たかみ嶺そさやけきまつてらす朝日の影のさすにまかせて」(二九一六)の歌であり、当該歌は下界を照らす「朝日」の日射しにまかせてみると山が高いので峰が静明であるとの意を籠めており、天台教学の世界観が反映している。そのうえ観性のために源頼朝が寄進した金剛力士像が西山の善峯寺の楼門に聳立しており、『愚管抄』の雛型となる『慈鎮和尚夢想記』を草し、「武士將軍」の源頼朝が王法に参入することを道理と頓悟したこともあり、すでに指摘されているように遊戯性のある歌を慈円は多く詠む。そして仏法と王法の中枢に直接関与していたときに比べて、余裕ある西山隠棲の日々のなかで「あそび心」が滾々と慈円の心にあふれ出てくる。

西山の空間で三十年近く前に『古今集』校合をしていた寂超の事蹟に思いを凝らした慈円は、承安四年(一二七四)から翌年にかけて寂超が創つていた「世継物語」の『今鏡』に倣いながら、西山の高台から眺望できる東山の山稜から耀かす「朝日」の彼方にある東国の鎌倉幕府に思いを馳せる。そして西山に文才・学才のある門弟や九条家の家司等と呼び入れて「頼朝の物語」の原『平家物語』の『治承物語』を企画・創出させる慈円圏を組織したわけである。⁽⁵⁾

屋代本『平家物語』(巻五「物怪之沙汰」)での源雅頼の家に仕える侍の夢を語り、頼朝が平家一門を滅亡させる元暦二年(一一八五)までのことを予告している。それは『慈鎮和尚夢想記』の夢告と照応する。侍の夢の直前に布置されているのが、徳大寺実定の今様をうたう「月見」の章段なのである。ところが屋代本以外の他の諸本(源

平闕諍録・南都本は欠巻)では、「月見」の章段の位置は同じであるものの承久元年(二二九)に文武兼行の「臣」の顕現した事象すなわち九条頼経の將軍継嗣までのことを侍の夢では予告している。この『平家物語』諸本の異同からも屋代本が『治承物語』に最も近い構造を有していると思われる。

本稿では、屋代本『平家物語』をもとにして源頼朝の挙兵を語る直前に布置されている年中行事の「月見」の章段で、今様をうたう徳大寺実定の形象は西山の宗教空間で創られていたことを明らかにしていきたい。

(一) 徳大寺実定の登場の仕方

治承四年(二二八〇)六月八日、四百年間つづいて宮城を清盛は福原へ遷す。この事象は「同六月八日、福原二ハ新都ノ事始、有ヘシトテ、上卿二ハ徳大寺左大将実定卿、土御門宰相中将通親卿、奉行二ハ……」(屋代本・巻五「福原遷都事」とみえ、まず実定の名をあげている。すでに物語では、清盛の父の忠盛が備前國から上洛して来る際に「在明ノ月モアカシノ浦風ニ浪ハカリコソヨルトミエシカ」(屋代本・巻一「平家一門繁昌事」と施線で、月が明るいことを月の名所の明石とをかけて詠じていた。福原では貴顕が「各々名所之月ヲ見ントテ、思々心々ニ浦々島々ハ渡リ給フ。或ハ源氏ノ大将ノ昔ノ跡ヲ尋ツ、須磨ヨリ明石ノ浦伝、」(屋代本・巻五「徳大寺左大将実定卿旧都近衛河原皇太后宮大宮御所被參事」と語られており、『源氏物語』を本説取りにしながらか、きわめて優雅な情趣をたえた哀愁が一方では充溢している章段が「月見」なのである。「古キ都ノ月ヲ恋ヒテ、」近衛河原にある大宮こと妹の皇太后多子のいる御所を訪ねた実定は、多子に仕えている「待宵の小侍従」を呼び出して、

……福原ヨリソ被レ上ケル。何事モハヤ替ハテ、門前草深ク(中略)黄菊紫蘭ノ野辺トソ成ニケル。古郷ノ名残トテハ、今ハ近衛河原ノ大宮計ソ坐シケル。実定卿其御所へ參テ、待宵小侍従呼出シ、古へ今ノ物語シ、サ夜毛漸々深行ハ、ヤウチャウノ音取朗詠シテ、旧都ノ荒行ヲ、今様ニコソウタハレケレ。

旧キ都ヲ来テミレハ浅芽力原トソ荒ニケル

月ノ光ハクマナクテ秋風ノミソ身ニハシム

ト、推返く二三反ウタヒスマサレタリケレハ、大宮ヲ始メ進セテ、御所中ノ女房達、皆袖ヲソヌラサレケル。夜モ已曙ケレハ、大将暇申給テ、又福原ヘトテソ被_レ下ケル。大将ノ御共ニ候藏人泰実ヲ召テ、「侍従カ余リニ名残惜ケニ思タリツルニ、汝還テ何トモ云テコヨ」ト被_レ仰ケレハ、藏人走帰テ、侍従ニ申ケルハ、「申セト候」トテ、

物カハト君カイヒケム鳥ノ音ノ今朝シモイカニ悲シカルラン

侍従涙ヲ押テ、

マタハコソ深行鐘モツラカメアカ又別ノ鳥ノ音ソウキ

此様ヲ参リテ申ケレハ、「サレハコソ汝ヲハツカハシツレ」トテ、大将大キニ被_レ感ケリ。ソレヨリシテソ物カハノ藏人トハ申ケル

(屋代本・巻五「徳大寺左大将実定卿旧都近衛河原皇太后宮大宮御所被参事」)

とあるように、今様をうたったのである。施線の言辞のうちの「紫蘭」は、延慶本では「黄菊芝欄之野辺トソ成ニケル。」とあつて、波線にあるように「芝欄」と相違している。『延慶本平家物語全注釈(巻四)第二中』(汲古書院・二〇〇九年)では「芝欄」は靈芝と香りの良い欄で、秋の風物として「黄菊」に合わせるのは「紫欄」(ふじばかま)がより適切か。(五二八ページ)との注解があり、屋代本が修辞から適切であるといえよう。荒廃してしまつてゐる廟堂を象徴させている。そのことは『明月記』同年十月二十七日条に、

遷都の後幾ばくもあらざるに蔓草庭に満ち、立部多く顛倒し、古木黄簫策の色あり。傷心、箕子の殷墟を過ぐるが如し。

とみえている。同時に今様をうたう実定の形象と似た箇所が『今鏡』にある。すなわち、

この富家の大臣は、御みめもふとり、清らかに、御声いとうつくしくて、年老いさせ給ふまで、細く清らにおはしませしき。朗詠などえならずせさせ給ふ。また箏の琴は、すべてならびなくおはしませしき。歌は

さまでも聞えさせ給はざりしに、宇治にこもり居させ給へりしときぞ、

佐保川の流れたえせぬ身なれどもうき瀬にあひて沈みぬるかな

と詠ませ給ひけるとかや。

(藤波の上・第四「宇治の川瀬」・(一六二))

である。保元の乱後に知足院に蟄居している藤原忠実の動静を捉えている。施線にあるように風流人としての忠実を押し出す。二重施線では朗詠・箏の琴に長じていたと蕭々とした筆致で語っている、本物語の福原遷都直後の落莫としている多子の御所での実定の形象と近似している。廟堂の風流韻事に関心を注いでいる『今鏡』に倣って、西山の慈円園で八月十五夜の「月見」の章段を物語化したのであろう。それは『今鏡』に、多子の夫君の近衛天皇が崩じ、今度は二条天皇から無理無体の求婚があり、断り切れずに、いわゆる「二代の后」になってしまった実定の妹の多子は、

昔の御住居も同じさまにて、雲井の月も、光かはらずおぼえさせ給ひければ、

思ひきや憂き身ながらにめぐりきて同じ雲井の月を見むとは

とぞ、思ひかけず、伝へうけたまはりし。

(藤波の下・第六「宮城野」・(二五六))

とあるように、つらい身でまたもや同じように月を見るとは思いもしなかったと詠じているからである。これは本物語に、

先帝ノ昔ヲ恋シク思召レケム、御涙ヲ押ヘサセ給テ、

シラサリキ憂身ナカラニメクリ来テヲナシ雲井ノ月ヲミントハ

世二ハ如何ニシテ漏ケルヤラン、哀ナル御事ニソ申ケル。

(屋代本・第一「二代之后立事」)

と照応するからであるし、さらには『今鏡』に、

いづれの齋宮とか、人の参りて、今様うたひなどせられけるに、末つ方に、四句の神歌うたふとて、

植木をせしやうは 鶯住ませむともあらず

と歌はれければ、心とき人など聞きて、「憚りあることなどや出で来む」と思ひけるほどに、

くつくつかうなが並め据ゑて 染紙よませむとなりけり

とぞ歌はれたりけるが、いとその人歌詠みなどに聞えざりけれども、えつる道になりぬれば、かくぞ侍りける。

〔打開・第十「敷島の打開」・三七〇〕

とあり、他にも『今鏡』には「侍従大納言成通と申すこそ〔中略〕今様うたひ給ふ事、たぐひなき人」〔藤波の下・第六「雁がね」・三三三〕とあってしばしば今様にふれている。したがって、『今鏡』の影響が本物語にあると想定してよいであろう。

諸本の異同から窺うとき、延慶本では「八月十五夜ノクマナキニ、大宮御琵琶ヲ弾セ給ケリ。」……五更ノ天二成ヌレバ、涼風颯々ノ声ニ驚テ、ヨキ別給ヌ。」として、「待宵の小侍従」の「待宵」の由来をめぐる説話もあり、右文のように屋代本では「大宮ヲ始メ……」と点描されているだけで、「大宮」すなわち多子が琵琶を弾く場面がなく、そこにむしろ古態をとどめているとされている。⁽⁶⁾ 屋代本は、『今物語』(二〇「やさし蔵人」)・『十訓抄』(二ノ十八「ものかは」の蔵人)にも載っている説話をそのまま素材にした簡素な展開になっている。櫻井陽子は「原話の性格を残しつつも、物語展開の中で、有機的に位置付けられるよう、編集の手を加えている点は注目されよう。遷都によつて破壊されていく古きよき貴族世界への複雑な感慨を今様が表わし、また、その世界の残映であるかのような恋人との別れの場面、歌の贈答を『今物語』に抛りつつも、更にそれを微妙に変質させて描き、完結させる。」と延慶本の特徴を論じている。⁽⁷⁾ 屋代本は『今物語』(二〇「やさし蔵人」)での「大納言なりける人、小侍従と聞こえし歌よみにかよはれけり。〔中略〕この大納言も、後徳大寺左大臣の御事なり。」と緊密に対応するからには、他の諸本より既存の素材が生々しく露出しているといえるだろう。⁽⁸⁾

盲人の芸である「当道」の中興の祖と位置づけられる覚一が制定した本では「月見」の章段として平曲の「句」となっている。この覚一本と比較して、屋代本ではより編年体的な配列になっており、「福原遷都事 付代々諸国所々都遷事」の章段に直結させている当該の章段は、『今鏡』を引き継ぐ「世継物語」としての原『平家物語』の屋代本は『治承物語』から注意されてよい。より類似する話柄を一箇所に集めて関連をつよめる覚一本に比較して、ストーリーとして「世継物語」に近いからである。すでに「鹿ヶ谷事件」の物語に実定は登場していた。妙

音院師長（今様合せ）の判者を務めたりした琵琶の名手が辞退した左大将の職を藤原成親がそれを熱望した。ところが、平重盛が後任に就いた。成親はこれを恨んで鹿ヶ谷の山荘に一味を集めて平家討伐の密議を凝らし、多田藏人行綱の密告によつて発覚して、清盛によつて成親は処断されてしまった。ところが、実定は、清盛の信仰する厳島社に参詣し、当社で、

七日参籠ありけるに、内侍ども、舞樂も三か度おこなひて、もてなしたてまつる。実定卿、今様歌ひ、朗詠して、神明に法樂あり。

（屋代本は欠巻のため、同じ系統の百二十句本・巻二「徳大寺殿厳島参詣」を引用）

と、実定は今様をうたい、その後、厳島の内侍を都に伴つて帰途につき、歓待する。そのことを知つた清盛は、実定を左大将に任じたとなつてゐる。本物語の終末にも「忍ノ御幸成ケレ共、花山院、徳大寺、土御門以下ノ公卿六人、」（巻二「法皇為女院閑居觀覽大原御幸事」）と点描されている。実定は鹿ヶ谷事件より以降、登場し続けているのは刮目に値する。指弾されている成親とは対照的にそれほど目立たないが、実定は好意的な造型がなされていく。

本物語の実定の特質について、春田宣は「虚構を交えた実定の説話は、一つには賛嘆から挿入されたものであろうが、やがて成親説話との関連を含みながら章段に動揺をきたし、（中略）鹿ヶ谷事件の発端から現われる実定の話は独立的な要素を多分にもつており、ないまぜられていった痕跡をとどめている」⁽⁹⁾としてゐる。富倉徳次郎は「実定が『平家物語』の成立に何らかの關係があるらしくも思われるのであるが、その辺は全く不明である」としてゐる。⁽¹⁰⁾水原一も「一体平家物語に登場する実定は、例の徳大寺厳島詣によつて左大将を獲得する話や、月見で近衛河原大宮を訪う話に登場するが、おそらくそれらにのみとどまらぬ深い關係を平家物語に対して持つものと考えられる。（中略）源平興亡史を捉える視野とは別の何かの理由があつたかもしれず、（中略）平家物語という作品と実定との関わりは、断片的資料の採用關係にとどまるものではないと思われ。」⁽¹¹⁾としてゐる。引用した文章のなかでも春田宣の波線部の「賛嘆から挿入・富倉徳次郎の施線部の「実定が『平家物語』の成立に何らかの關係がある」・水原一の二重施線部の「実定との関わりは、断片的資料の採用關係にとどまるものではない」との三つの言説に着

目したとき、実定の形象をめぐる本物語の成立事情へ測鉛を下ろしてみる必要がでてこよう。

(二) 西山の「壇越」としての徳大寺家

慈円が「あそび心」から原『平家物語』の『治承物語』を創出させた西山の空間をみていこう。『玉葉』養和二年（一一八二）一月二十六日条に「山の法印来たる。即ち西山の別所に向はれ了んぬ。」、寿永元年（一一八二）八月九日条に「法印来らる。只今西山に向ふと云々。」、文治六年（一一九〇）三月十二日条にも「今日、法印又来たり。終日談話す。明日西山に帰入すべし。又晦比出京すべしと云々」等とあって、しばしば慈円は西山に向向していた。その頃、『玉葉』寿永二年（一一八三）九月四日条に、

四日 丙寅。陰晴未だ定まらず。前源中納言雅頼卿来たる。余疾ひに依り廉を隔ててこれを謁す。世上の事等、多く以て談説す。（中略）夜に入り觀性法橋来たる。出でながらこれに謁す。件の人内大臣母堂の忌に籠る故なり。

とみえる。慈円の師にして西山往生院の院主であった觀性は、施線部にあるように徳大寺実定の母のために追善供養をしている。この事実は大へん留意する必要があるだろう。

西山の往生院は後年には三鈷寺と称されるわけであるが、『三鈷寺文書』のなかに実定より出された下文がある。その全文を掲出してみよう。すなわち、「右大臣藤原實定家政所下文案」（鎌倉遺文 三三三号）に、

右大臣家政所下 鶏冠井城乙訓郡 殿寄人沙汰人等

可早充行三位殿御月忌并御忌日新田參町事

神饗里

卅二坪五段小 三斗代貞光

同里卅四坪六十歩 三斗代貞光

榎小原里

三里四段 五斗代貞光

田邊里

十九里四段半 三斗代國利

己上御月忌新

神饗里

廿六坪六段六十歩 四斗代貞光

同里廿七坪三段 四斗代貞光

弓絃明里

八坪三百歩 四斗代貞光

己上御忌日新

右件田參町、爲故三位殿御月忌並御忌日用途料所、被割充也、

寄人沙汰人等宜承知、不可違失、故下、

文治四年四月 日 案主大江

令大皇太后宮大屬菅野朝臣 大從主水令史清原真人

別當散位藤原朝臣

である。当該文書は山城国乙訓郡の寄人や沙汰人などに対して施線にあるように「三町の田」の知行分で、二重施線の「故三位殿」すなわち母の忌日に要する供養の経費に充てるように指示したとする「下文案」であった。¹²⁾ この内容の主旨に照らして、徳大寺実定が西山の壇越（寺のために金品を施す信者）であったのはいうまでもない。またその時より二十年前の「大法師賢仁去狀」〔平安遺文〕三四八八号）に、

北尾往生院者、故聖人逝去之後、成荒廢之地、無一有情、爰賢仁先年之比、移住此處、相語永奠大徳、令建立堂舎、守護山内、令生樹木、而中納言法橋御房依有御要、永以所進上也、敢不可有他妨之狀、如件、

仁安肆年貳月壹日

大法師（花押）「賢仁」

ともあり、仁安四年（一一六九）二月に賢仁（別所の西山の開基である源算が入寂後、観性が籠居すまでの期間、房舎等を整備）は施線の「中納言法橋御房」すなわち観性に往生院を譲り、第二世院主の観性は西山の諸堂舎の整備と宗教活動の振興を鋭意すすめていく。その実情は「中宮大夫 藤原實基 家政所下文」〔『鎌倉遺文』三七一四号〕からも裏付けられる。すなわち、

中宮大夫家政所下

可早宛行善峯寺往生院不斷念佛供料田參町事

在山城國鶏冠井庄間副坪付等

右、件田元者、故中納言法橋之時、毎月護摩用途料、女房三位家之時、所被引募也、

其所當米段別

肆斗、庄本器定拾貳石也、法橋一期之後、門弟已及兩代、居諸漸推移、行法亦如廢、然而願願之素意、猶不致供料之違亂、爰自去承久三年之冬比、依善惠聖人之興隆、於彼往生院修不斷念佛、其行忽難始、用途無足之間、專爲結淨土之業因、則勸進有縁之檀那、先公爲其一分與彼善願、因茲改件護摩用途、宛此念佛供料、凡念佛永不退轉者、供料又不可依違、宜限來際、斷庄家之妨、停万雜公事、彼寺一向領知、但其行若及陵廢者、隨時可斟酌者歟、抑於此供料沙汰者、縱雖爲上人之門弟、不可致自由之沙汰、念佛結衆外、依非領知之仁也、一衆相議、勿有偏頗、仍所仰如件、故下、

安貞二年二月四日

知家事右官掌中原（花押）

令中務少丞中原（花押）

別當助教兼山城守中原朝臣（花押）

とみえており、二重波線にあるように元来、「不斷念佛供料」として「三町の田」の知行分は実定の母より寄進されていたので、観性が建久元年（一一九〇）に入滅した後、施線にあるように「行法は廢れるが如し」の事態すなわち教学研究が円滑に進まない事態に陥ってしまい、そのため二重施線部にあるように承久三年（一二三二）冬

頃より、その時の往生院第四世院主である證空が有縁の壇越に勸進、そこで波線にあるように実定の三男の公繼が、第二世院主の觀性在世時より行われてきている往生院での「護摩」の仏事の用途を改めて「此の念佛供料」に振り替え、公繼の次男の実基（二〇一〜二七三）が父の遺志を引き継いで、円滑に仏事がすすむように尽瘁したというわけである。

安貞二年（二二三八）二月四日の本文書を発給した二年後、寛喜二年（二二三〇）には證空の門弟で東国出身の富強を誇る宇都宮入道蓮生が、往生院に土地を寄進し、證空の「念佛結衆」の一人として大いに活躍していくことになる。^[13] なお、この東国出身武士の蓮生は後述するように原『平家物語』の『治承物語』創出のための慈円圈に参画する人材であったことを特に顧慮しておかねばならない。

徳大寺実定の孫の実基も非凡な人臣であり、有力な壇越であった。^[14] とすれば寿永二年（一一八三）頃から安貞二年（二二三八）当時の半世紀近くに亘って徳大寺家三代は、西山の念仏聖の間ではしばしば篤信の一族として話題にされることがあったはずである。現存している当該文書を分析した上山隆も「觀性と徳大寺実定との結び付きが窺える。実定は父同様善峰寺の有力な壇越の一人である。（中略）觀性自身も政治的な流れを正確に把握できる能力を持っており（中略）西山が発展できたのである。」と論じている。^[15] その典型例を挙げてみよう。觀性は、文治五年（一一八九）六月には鎌倉に赴き、蓮生の大叔父の八田知家が参列している鶴岡八幡宮の塔供養の導師を勤め、源頼朝と懇談している（『吾妻鏡』同月三日・八日・九日の各条）。そして頼朝は塔供養を勤めた報酬として善峯寺の楼門に金剛力士像を運慶に造らせて寄進したのであった。その理由は、第五十六代天台座主の全玄（一一二二〜一九二）が義経調伏の四天王法を修して頼朝に協力したので、全玄の名代として觀性が鶴岡八幡宮の塔供養の導師に招かれた。^[16] そこで觀性への謝礼として金剛力士像を、頼朝が寄進したという歴史的背景があつたのである。

金剛力士像は、「武」の象徴のモニュメントとして西山の仏事作善に付随して伝承されていくわけである。既述したように金剛力士像が西山の善峯寺の楼門に聳立しており、それをも見据えながら『愚管抄』の雛型となる『慈鎮和尚夢想記』を承元三年（二二〇九）六月に慈円は起草したのであった。この『慈鎮和尚夢想記』のな

かで「武士將軍」の源頼朝が王法に参入することを道理であると頓悟した慈円は、翌年の承元四年頃から「頼朝の物語」である原『平家物語』の『治承物語』を企画・創出させていく。西山に慈円圈が組織されていくのである。

九条家の頼経が四代將軍繼嗣になる直接の原因である源実朝の暗殺の事象を詳述するにあたって、『愚管抄』に、

……コノ実朝ガ頸ヲ持タリケルニヤ、大雪ニテ雪ノツモリタル中ニ、岡山ノ有ケルヲコエテ、義村ガモトヘユキケル道二人ヲヤリテ打テケリ。トミニウタレズシテ切チラシクニゲテ、義村ガ家ノハタ板ノモトマデキテ、ハタ板ヲコヘテイラントシケル所ニテ打トリテケリ。猶く頼朝ユ、シカリケル將軍カナ。ソレガムマゴニテ、カ、ル事シタル。武士ノ心ギハカ、ル者出キ。又ヲロカニ用心ナクテ、文ノ方アリケル。実朝ハ、又大臣ノ大将ケガシテケリ。又跡モナクウセヌルナリケリ。

(巻六——三二二—三三ページ)

とあつて、施線で「武」を担う將軍であつた頼朝を追懐しながら、二重施線では「文」の側に傾斜してしまつてゐる実朝を指弾したのであつた。その時より、四十年前の頼朝の旗揚げの往時を、『愚管抄』のなかで「……王法仏法如三牛角」。不_レ可_レ被_レ滅」之由愚詞ヲ申サレニケレバ、(中略) 又治承四年六月二日忽ニ都ウツリト云事行ヒテ、都ヲ福原ヘ遷テ行幸ナシテ、トカクニバカリナキ事トモニナリニケリ。」(巻五——二五〇ページ)と摘記してゐる。この波線の言辞は、本物語の

「平家於ニ悪行ニ一竟メン。去_ル安元ヨリ以来、多クノ臣下脚上、或ハ流シ、或ハ失ヒ、関白ヲ流シ奉テハ、聳ヲ関白ニ成奉ル。法皇ヲ城南ノ離宮ニ遷シ奉リ、高倉宮ノ御頸ヲ切り、残_ル所ハ今都ウツシ計ナレハ、加様ニシ給ニヤ」トソ人申ケル。

(屋代本・巻五「福原遷都事付代々諸国所々都遷事」)

との世評を含むと同時に『今鏡』が括つた嘉応二年(一二七〇)の平家一門と執政の「臣」の基房との衝突である「殿下乗合」よりの本物語の内容をも踏まえている。それは『愚管抄』には、当該の事象を批評して、

関白嘉應二年十月廿一日高倉院御元服ノ定ニ参内スル道ニテ、武士等ヲマウケテ前駆ノ本鳥ヲ切テシナリ。コレニヨリテ御元服定ノビニキ。サル不思議有シカド世ニ沙汰モナシ。次日ヨリ又松殿モ出仕ウチシテアラレケリ。コノフシギコノ後ノチノ事トモノ始ニテ有ケルニコソ。

(巻五——二四六—四七ページ)

とあつて、以下に平家一門の廟堂への進出にともなう横暴を漸層法の論理で詳述していく。そのため施線の言辞は頼朝の旗揚げを誘引する伏線を張っている。

数々の横暴を重ねる清盛を段階的に押し出して遷都を断行した事象を、前掲した『愚管抄』の波線部の「トカク云バカリナキ事ドモニナリニケリ」として、王法の危殆であったと慈円はみなしたのである。これにつづけて、

猶十二月廿八日二遂二南都へヨセテ焼ハラヒテキ。ソノ大將軍ハ三位中將重衡也。アサマシトモ事モヲ口カナリ。

(巻五——二五〇ページ)

とあつて、南部襲撃の事象を、波線部では仏法の破綻の寸言を添える。他方では廟堂で平清盛が「治承三年十一月十九日二解官ノ除目、同廿一日二任官除目ト云モノヲ行ヒテ」〔『愚管抄』巻五——二四八ページ〕、さらに後白河院の幽閉する暴挙を断行した事象を叙述していたから、王法が危殆も瀕してしまっていることも明確にしている。その直後で、

伊豆國ニ義朝ガ子頼朝兵衛佐トテアリシハ、世ノ事ヲフカク思テアリケリ。(中略)物ノ始終ハ有レ興不思議ナリ。其時モカ、ル又打カヘシテ世ノ主トナルベキ者也ケレバニヤ、(中略)「サレバヨ、コノ世ノ事ハサ思シモノヲ」トテ心オコリニケリ。又光能卿院ノ御氣色ヲミテ、文覺トテ余リニ高雄ノ事ススメスゴシテ伊豆ニ流サレタル上人アリキ。ソレシテ云ヤリタル旨モ有ケルトカヤ。但コレハヒガ事ナリ。

(巻五——二五二ページ)

として、源頼朝をはじめ『愚管抄』の叙述の正面に押し出す。このことから、仏法王法相依の道理を骨格としている『愚管抄』の方法が看取されるであろう。すきんだ治世のなかで旗揚げをし、平家側と対峙、源平の争乱、壇ノ浦の海戦から平家を族滅させて、廟堂を安寧に導いた頼朝を象る。文治二年(一一八六)に執政の「臣」の慈円の兄の九条兼実に「又頼朝関東ヨリヤウクニメデタク申ヤクソクシテ、世ノヒシトヲチヒヌト世間ノ人モ思テスギケリ。」(巻六——二七三ページ)との言辞を据えた。頼朝は治世の安寧に尽瘁したとして礼讃する。この時より、十六年前に平家の悪行である物語にみえる「殿下乗台」に関する事象があつたわけである。既述もしたように『今

鏡』が語り終えた嘉応二年(一一七〇)を引き継いだ「いくさ物語」としての本物語の始発にある「殿下乗合」に
 関連して慈円は『愚管抄』で「コノフシギコノ後ノチノ事ドモノ始ニテ有ケルニコソ」(巻五——二四〇ページ)との
 言辭と首尾照応している。とするならば、前掲した『愚管抄』の文章の二重施線に於いて、文覚が頼朝に、平家
 追討を促して、院宣を手にいれた物語を虚構と注記し、以下には「仰モナケレドモ、上下ノ御ノ内ヲサグリツ、
 イ、イタリケルナリ。」(巻五——二五二ページ)として、文覚が頼朝へ旗揚げを促したとの実相を対置した慈円の意図
 は、『愚管抄』以前に創出している原『平家物語』をもとに道理を説論していることになろう。

仏法王法相依の道理が通じなくなつたと兼実の慨嘆をことさらに取り上げて、清盛の遷都を語っている『愚管抄』
 の波線部の「トカク云バカリナキ事ドモニナリニケリ」(巻五——二五〇ページ)とした慈円の寸言には、実定が新都の
 福原から旧都へ帰還して今様をうたう本物語の「月見」の章段が慈円の念頭に置かれていと推定されてこよう。

(三) 慈円と今様の特性

『今鏡』を著した寂超は『源承和歌口伝』に、

下巻目六奥云、

治承四年卯月五日、於西山草堂書畢。同十八日相具寂超上人見合集付假名了。

貫之が自筆之古今を書写して人のもとへかへしつかはすとて、寂超

はたまきにちぐのこがねをみがきけむ昔の跡をとどめつる哉

とよめり。彼禪門本にや。

と刻んだ。治承四年(一一七九)四月五日に「西山草堂」で、周知のように保元の乱で敗れて讃岐国遷幸して崩じ

てしまつた崇徳院（一一九〇六四）の遺児である元性と承安五年（一二七五）以前に『今鏡』を創作している寂超とが『古今集』の校合をしていた。その文事があつた時から三十年程の歲月が流れて、慈円は九条家の立子が入内した慶事を見据えて源頼朝が王法に参入することを道理として承元三年（二〇九）六月に『慈鎮和尚夢想記』を起草する。これは再言するが、『愚管抄』の雛形となる思念の芽生えであつた。そして、既述したように『慈鎮和尚夢想記』起草の翌年頃から、西山の空間で『今鏡』を直視して新奇な「世継物語」である「いくさ物語」すなわち原『平家物語』の『治承物語』を慈円は企画・創出していく。

『山州名跡志』（乙訓郡）には「小塩ノ里 在善峯ノ麓」とあつて、善峯寺とその北尾にある往生院の高台から九十九折折りの阿智坂に沿つて下つてすすむと塩竈の遺跡があり、それは「傳へ云フ在原業平ノ朝臣塩屋ノ愛景色取難波海水令燒所ナリト……業平ノ塔在在所西方……又在原業平ノ母長岡住コト載伊勢物語」としている。これは『古今集』（巻第十七）に、

二条のきささきの、まだ東宮のみやすん所と申しける時に、大原野にもうでたまひける日よめる

なりひらの朝臣

大原や小塩の山もけふこそは神世の事を思ひいづらめ

（八七二）

と、藤原氏の社稷神を祀る大原野社へ業平が参詣して歌を詠じていたからであつた。業平は二十三歳で蔵人となり、詞書にあるように「二条のきささき」こと藤原高子の夫君である清和天皇の治世では官位がすすみ、五十五歳には蔵人頭をつとめた。そのうえ華やかな恋愛譚で飾られており、後世には歌人をはじめ文事に関心のある人々からは、業平は王朝のみやび男として知悉されていったのであるから、西山は優雅な雰囲気や漂う空間が醸成されていくのは至当であろう。西山には『今鏡』作者の寂超と元性とが『古今集』を校合した事蹟があり、既述したように嘉応二年（一一七〇）のを語りの現在として括つた『今鏡』を承けて、同年の王法の動揺である「殿下乗台」よりの「いくさ物語」の原『平家物語』を創出するための慈円圏で西山の空間に組織されることになった。

西山の往生院の第三世院主であった慈円を師としている證空は、第四世院主を引き継ぐ。さらに現世と来世にかけての生死を超えた念仏生活に入ること、すなわち「念仏即往生」とする西山派の教義を樹立させる。そのために修行している西山は「聖」の純度が高い空間として信仰が熾烈になっていく。證空が西山義を宣揚する以前、「住吉百首」跋文に「建久三年秋九月、占空閑之山寺、披清淨之道場、半行半座之勤如説修之、……」とあるように、善峯寺を「空閑之山寺」、往生院を「清淨之道場」と称していた慈円は、その五年後の承元元年（二二〇七）頃より往生院の第三世院主として西山に隱棲する。承元三年（二二〇九）十月作「厭離欣求百首」で、

いくとせに南無阿弥陀仏の成ぬらんみなもち月の空をなかめて

(五二二二)

いとひ出て西なる山のみねこえん契し月はまつらむものを

(五二二三)

猶てらせわかすむいほの行末を空ゆく月のにしの山の葉

(五二二八)

と詠じた。五二二二番歌では月の夜に浄土からの阿弥陀佛の迎講をからめ、二二三番歌・五二二八番歌では西に向かう月と浄土とを融合させているので、迎講を始めた源信の弟子の源算がひらいた別所の西山の真骨頂が露わであろう。證空が「念仏即往生」との信仰を昂揚させ、西山義を宣揚していく端緒になっていく道筋が、この三首を詠じた慈円からも窺えよう。さらに留意したいことがある。それは、西山で慈円が、

今様

花

春のやよひのあけほのによもの山へをみわたせは

花さかりかもしら雲のかからぬみねこそなかりけれ

(六〇四四)

郭公

花たちはなもにほふなり軒のあやめもかほるなり

ゆふくれさまの五月雨に山時鳥なのりして

(六〇四五)

月

秋のはしめに成ぬれば今年もなかははすきにけり
わかよふけ行月影のかたふく見るこそあはれなれ

雪

(六〇四六)

冬の夜さむの朝ほらけちきりし山路に雪ふかし

こゝろのあととはつかねともおもひやるこそあはれなれ

(六〇四七)

と今様をうたつていた。本物語の「月見」の章段で実定がうたう今様の遠景とみなせるのではあるまいか。そのことは、馬場光子が「今様は、今様を共有し理解し合える、共通の感覚を持った世界、集団的な「場」において「折れ合ふ」といふことで支られてきた。(中略)「場」の集団性としての今様の存在である。」と説明しているからである。¹⁸⁾『梁塵秘抄』をみると、また集団が組織されれば共通の理解ができ、

極楽浄土は一所 勤めなければ程遠し、われら

が心の愚かにて 近きを遠しと思ふなり

(二七五)

との今様がうたわれていることに照らしても、『阿弥陀経』等に説かれている極楽土への讃歎から一致団結することになるであろう。聖なる空間で各個人の心情を表現しながら、たがいが結束する。それは慈円圏の内実と相即しよう。それは、原『平家物語』を企画した慈円は家柄や身分にこだわらず、緇素の区別を無視して、学才・文才のある人々を西山に呼び入れる。緇素等互いの結束の機運が熟していくなかで、本物語が創出されていった。すなわち西山の慈円圏であったからである。要するに、西山で今様をつくって、それを人々がうたう所業とつながり、今様のはらんでいる「集団」の要素から慈円圏を組織したからに他ならない。本物語は艶麗な美しさをもはらませながら多様なかたちで創出されているといえよう。

今様には、

西山通りに来る木樵^{まきこ} を背を並べてさぞ渡る

桂川 後なる木樵は新木樵かな 波に折られて

尻杖捨ててかいもとるめり

(三八五)

とあるように、嵐山に近い区域を木樵の通過を点描し、さらには、

大原野 三首

大原や小塩の山も今日こそは 神代のことと思

ひ知るらめ

(五三二)

大原や小塩の山の小松原 はや小高かれ千代の

陰見む

(五三三)

千歳とぞ君が御代をば契るなる 小塩の山の峰

の姫松

(五三四)

とあるように西山の空間が見事に捉えられている。

前掲した『古今集』の八七一番歌の詞書では、

二条のきささきの、まだ東宮のみやすん所と申しけ

る時に、大原野にもうでたまひける日よめる

なりひらの朝臣

とあり、業平が参詣して歌を詠じているわけである。参詣したその時の個人的な想いであつた。ところが、今様の五三二番では、当該歌もとに大原野社が誉れある社と祝意へ転換させ、重層的に往時から現在の空間へ引き寄せている。¹⁹⁾五三三番では若い世代を祝福した明るい響きがあり、五三四番に至っては長寿を寿いでいる。これらの今様歌からも、承元末年から建保末年頃(二二〇〜二二八)に西山の慈円圈の内情が彷彿としてくるのである。²⁰⁾

建保元年（一二二二）九月に四天王寺別当に還補せられ、その職責に慈円は尽瘁していく。四天王寺内の聖徳太子を祀る聖靈院參籠中の建保四年（一二二六）正月に太子からの九条家興隆の靈告が慈円にもたらされた。その靈告が符合し始める時運のもとで、西山で創出されている「頼朝の物語」の原『平家物語』の『治承物語』を取用しながら、慈円は「武者ノ世」の動向を『愚管抄』別帖で叙述していくのであった。⁽²¹⁾

西山と四天王寺とは相互に信仰上から交流している。そのことは、『後拾遺往生伝』巻上・一六に、天仁元年（一二二七）十月に往生した永暹の伝に、

沙門永暹 申略 専好修行。往反諸山。遂住留善峰寺并天王寺。於此二寺。兩度書如法經。時人呼曰如法經聖。とあり、施線の善峯寺と四天王寺で如法經書写の仏事をしていた。その時から六十五年後の建久三年（一九二）九月、「住吉百首」跋文に、

建久三年涼秋九月占空閑之山寺披清淨之道場半行半座之勤如說修之無二無三之教如法書之則捧持二部妙典遙往詣四天王寺於彼靈地忽經再宿然間或備十箇種之供養或唱一晝夜之念仏翌日之朝庭露之余即詣上宮太子之古墳深凝下化衆生之懇地……

（建久三年涼秋九月、空閑の山寺を占め、清淨の道場を披き、半行半座の勤め、説の如く之を修し、無二無三の教へ、法の如く之を書く。則ち二部妙典を捧持し、遙に四天王寺に往詣し、彼の靈地に於いて、忽に再宿を経たり。然る間、或は十箇種之供養を備へ、或は一晝夜之念仏を唱ふ。翌日之朝、庭露之余り、即ち上宮太子之古墳に詣り、深く下化衆生之懇地を凝す。……）

とやはりしたためている。施線の「空閑之山寺」とは西山の善峯寺、施線の「清淨之道場」とは往生院のことであつて、西山で慈円は精進潔斎して供養して書写した二部の如法經を携えて四天王寺へ參詣し、手向けた。また「一晝夜之念仏」を唱えて、翌朝、聖徳太子の廟に向いた。⁽²²⁾ 既述したように七年前、西山の觀性の許に向いた兄の兼実の仏事とつながつてもいる。入滅した師の觀性を偲んで慈円は兼実に、

建久三年八月觀性法橋舊迹の西山往生院にまかりて如法經かくとて歌あまた

よみて人々の許へ遣なかに殿下へ申

山てらの秋はむかしにはかはらねと主なき色はこゝろにそそむ

(五六六四)

と詠んでいたからであった。さらに看過できないのは慈円が西山の壇越である徳大寺実定の同母弟の公衡と詠み交わして、

菩提院三品羽林之許へつかはず

たつねくるわかたもとは露おちて昔の跡に秋風そふく

(五六六八)

かへし

なかむらんむかしの跡を思ふにはよそのたもとも露はをきけり

(五六六九)

との二首がある。五六六八番歌で観性を偲んで落涙する思いを伝えると、そこで公衡も返歌の五六六九番歌では、この時の善峯寺と四天王寺での如法経書写の仏事善行には加わらなかつた私の袖にも涙がこぼれますと和した。他にも「思やれみちさえていとしく雪のそこにもしつむ心を」(五四五五)とあって、大雪に寄せて昇進できない自己の不遇を公衡は訴えていた。ところが程なく昇進したので、慈円は「ことのはにやかてはなさくしるしは雪の内より誰もしるかな」(五九八五)として、去年の雪の頃からあなたの昇進は皆が知っていたことだと讃えたのであった。

四天王寺の浄土信仰をめぐる今様がある。すなわち、

極楽浄土の東門は 難波の海にぞ対^{むか}へたる 転

法輪所の西門に、念仏する人参れとて

(二七六)

とうたわれている。この一七六番では「四天王寺縁起」である『荒陵寺御手印縁起』の教え、すなわち当寺の西門は極楽浄土の東門に当るとする信仰に則っている。さらには同様の教えが、

極楽浄土の東門に 機織る虫こそ桁に住め 西

方浄土の灯火に、念仏の衣ぞ急ぎ織る

(二八六)

とうたわれており、二八六番では秋の虫にことよせて念仏唱和そして日想観による極楽往生を志向したものであった。四天王寺の外側につづく難波の海の彼方にある浄土に身を委ねようとする宗教的な行為がそこに発現していくのも極めて至当であった。⁽²³⁾ 西山の往生院院主を證空に譲り、四天王寺別当に返り咲く慈円から、当該の今様は意味深長である。

文芸性・宗教性・風俗性が入り交じっている『梁塵秘抄』の世界は多様な空間へ波及し、述懐歌や説話集そして物語に投影していく。そのため今様が活況を呈した世を評して、菅野扶美が「雅俗の混淆する風流の空間が現出した」と評したのは正鵠を射ている。⁽²⁴⁾ とすれば、『梁塵秘抄』と『梁塵秘抄口伝集』の二つの作品を著わした後白河院の在世した都の土壤には、原『平家物語』の『治承物語』が創出させていく「あそび心」を胚胎させる慈円の心情が透視できよう。西山と四天王寺との両空間は今様からも繋がっており、西山の往生院の院主を慈円の門下の證空に第四院院主を委ねて、その後、建保四年（一二二六）正月に四天王寺別当に就いている慈円に九条家の僥倖をめぐる聖徳太子の霊告がくだり、建保六年（一二二八）十一月には九条家の女から生誕した親王が立坊・承久元年（一二二九）六月に九条家の三寅が將軍継嗣する時運を見据えて、それを末代の道理と揚言していく。『愚管抄』別帖の同時代史である。西山の慈円圏で創出している本物語を取用しながら『愚管抄』別帖の跋文で、

末代ノ道理ニカナヒテ、佛神ノ利生ノウツハ物トナリテ、今百王ノ十六代ノコリタル程、佛法王法ヲ守リハテンコトノ、先力ギリナキ利生ノ本意、佛神ノ冥應ニテ侍ルベケレバ、ソレヲ詮ニテ書ヲキ侍ルナリ。

（巻六——三二七ページ）

として、施線で仏法王法の道理が通ったことを寿ぎ、同時に二重施線では「冥顯二法」の道理に則つて梓付け、現実の背後にある冥衆のはからいであつて、頼朝を叙述の正面に押し出した際の「物ノ始終ハ有レ興不思議ナリ。其時モカ、ル又打カヘシテ世ノ主トナルベキ者也ケレバニヤ、」^(巻五——二五三ページ)の思念からも叙述しているとした。波線では、百王思想から人皇初代から始発させ、第七十七代の後白河天皇の「武者ノ世」より第八十四代の順徳天皇の在位している治世の様々な事象のうちの「詮」すなわち眼目になるものを叙述してきたと釈明して

別帖を括っている。

(四) 『林下集』の俊成歌から慈円の道理史観へ

嘉応二年(一一七〇)、執政の「臣」基房等一行と平家との武力衝突から治世の動揺を始発させて、平家一門の横暴・源頼朝の旗揚げ・廟堂の安寧に努めていく頼朝、それが「いくさ物語」である原『平家物語』の主題である。このことは『愚管抄』全体の論理展開と合致しており、本物語が西山の慈円圏で創出されているからであった。頼朝の旗揚げの前年、治承三年(一一七九)頃までの歌を載せている徳大寺実定の家集『林下集』の冒頭には、

皇太后宮大夫俊成卿十首題よみて申しおくられしに、 立春

けふこゆるはるまちはほにあふさかのせきのし水もしたむせぶなり (一)

があつて、自己の悲哀を、承安二年(一一七二)二月に皇太后宮大夫となつていてる俊成に訴えていた。その後、建春門院北面歌合等の歌合判者をつとめてより、歌壇での地位を確立した俊成は、治承二年(一一七八)には九条家の和歌師範に迎えられた。三百七十九首を収載している本家集の末尾近くに、次の四首が配された。すなわち、
大将になりはべりたりし時、俊成入道の申しおくる二首

くものうへやちかきまもりとなりぬればほしのくらぬもうたがひぞなき (三三三)

みかさ山さしのぼりぬるうれしさをあはれむかしの人に見せばや (三七四)

返歌

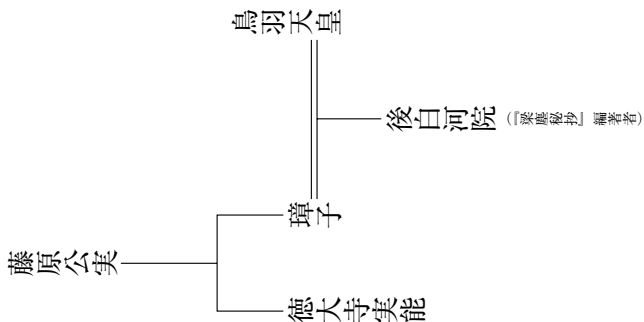
のぼるべきほしのくらぬのまぢかさにくものうへまでひかりをぞさす (三七五)

なきかげもいかにうれしとおもふらんふきつたへつるみよのはるかぜ (三七六)

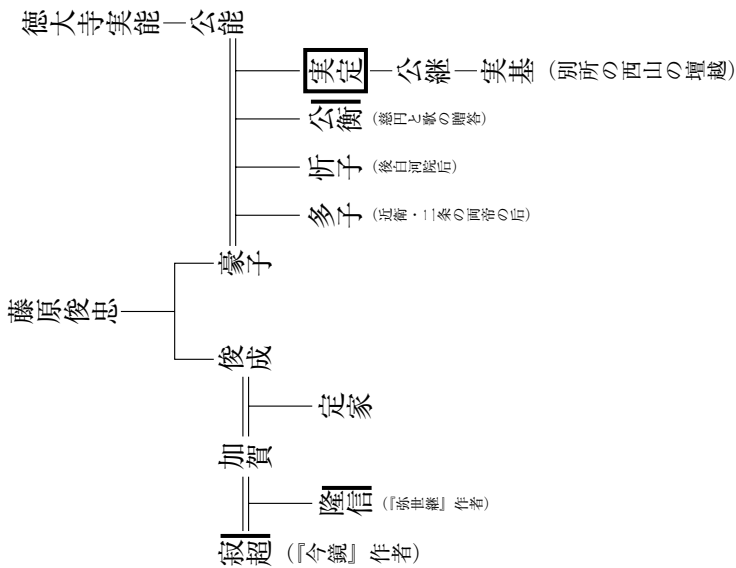
であつて、安元三年(一一七七)十二月に実定が左大将に任じられたのを心から祝贺する俊成の歌が贈られ、実定も欣快に堪えないと詠じた。過ぎ去つた苦難の道のすえに大将の顕職に就くまでの十二年間に亘る実定の心の

軌跡が本家集から辿れる。²⁵⁾ 俊成は実定の母豪子の異母弟であり、俊成と加賀とのあいだに生まれたのが定家であつた。一方、『今鏡』の作者の寂超は既述したように治承四年（一一七九）四月に「西山草堂」で元性と『古今集』の校合の文事を行つていた。既述したように寂超が創作した『今鏡』は嘉応二年（一一七〇）で物語を括つた、それを引き継いで平家側による執政の「臣」への暴挙、すなわち「殿下乗合」の物語をふまえて、『愚管抄』では「関白嘉應二年十月廿一日高倉院御元服ノ定ニ参内スル道ニテ、武士等ヲマウケテ前駆ノ本鳥ヲ切テシナリ。（中略）コノフシギコノ後ノチノ事ドモノ始ニテ有ケルニコソ。」（『愚管抄』巻五——二四六〜四七ページ）として、西山の空間で創出されてきている原『平家物語』の『治承物語』をも念頭に置いて道理を説論していく。寂超は加賀の先夫であり、寂超と加賀とそのあいだに『弥世継』の作者の隆信が生まれ、俊成と加賀とのあいだに定家が生誕する。その縁戚関係図を掲出してみよう。とすると次のようになる。

〔縁戚関係①〕



〔縁戚関係②〕



この縁戚関係図からも、ただちに想起されるのは前掲した物語のなかで、

実定卿其御所へ参テ、待宵小侍従呼出シ、古へ今ノ物語シ、サ夜モ漸々深行ハ、ヤウヂヤウノ音取朗詠シテ、旧都ノ荒行ヲ、今様ニコソウタハレケレ。

旧キ都ヲ来テミレハ浅芽力原トソ荒ニケル

月ノ光ハクマナクテ秋風ノミソ身ニハシム

ト、推返く二三反ウタヒスマサレタリケレハ、大宮ヲ始メ進テ、御所中ノ女房達、皆袖ヲソヌラサレケル。夜モ已テニアケ曙ケレハ、大将暇申給テ又福原ヘトテソ被_レ下ケル。

(屋代本・巻五・「徳大寺左大将実定卿旧都近衛河原皇太后宮大宮御所被参事」)

とあつたように、旧都の妹多子のいる御所に出向いて「旧キ都ヲ来テミレハ……」と今様をうたう実定の形象との関連である。

『玉葉』安元三年(一一七七)三月五日条に「左大将重盛を以て内大臣に任じ、前大納言実定を以て大納言に還任す。」とあり、後白河院政のもとで前年の安元元年(一一七五)に声明と琵琶に長けていた妙音院師長は内大臣であつたが太政大臣へのぼる。それにともなつて平重盛が内大臣になり、そして実定が大納言に還任したのであつた。同年六月一日に清盛は成親・成経・西光を捕らえ、七月九日には備前国で成親は処断された。その五ヶ月後の『玉葉』十二月二十七日条には「小除目あり。陣の於てこれを行はる。左大将実定」とあつて左近衛府の長官を兼任する。その二年後に実定は、

はのはやしはなさくはるのうれしさをつつむほどなりにたのむもれ木

(三七九)

と詠んで、『林下集』を括つた。以降の実定の官職の推移をたどると、この時から四年後の寿永二年(一一八三)には内大臣に就き、文治二年(一一八六)には右大臣、文治五年には左大臣の顯職へ昇進したのであつた。

西山で本物語を企画した慈円の史論の『愚管抄』をもとにしながら、西山の空間と実定の関連を窺つてみよう。本物語の肯綮にあたる「武者ノ世」の治承寿永の内乱の顛末から仏法王法相依の道理に則つて治世を安寧に導

いていく源頼朝を端的に取り出しているのは『愚管抄』付録の文章の前半部すなわち「史」の論に於いてである。人皇初代の神武天皇より第八十二代後鳥羽天皇の在位している建久九年（一一九八）までを全七期に分け、その第五期目で「初ヨリ其儀両方ニワカレテヒシク論ジテユリユクホドニ、サスガニ道理ハ一コソアレバ、（中略）シカルベクテ威徳アル人ノ主人ナル時ハコレヲモチイル道理也。コレハ武士ノ世ノ方ノ頼朝マデ歟。」（巻七——三三五——三三六ページ）として、施線で頼朝を礼讃した。第六期目では「カクノゴトク分別シガタクテ、（中略）ヒガゴトニナルガ道理ナル道理ナリ。（中略）世々ヲチクダル時ドキノ道理ナリ。コレ又後白河院ヨリコノ院ノ御位マデカ。」（巻七——三三六ページ）としている。第五期目では保元元年（一一五〇）の乱の勃発以降の「武者ノ世」を道理として捉え、頼朝の在位した正治元年（一一九九）までである。第六期目では久寿二年（一一五五）に後白河天皇即位のから建久九年（一一九八）の後鳥羽天皇在位までの廟堂の内実を鳥瞰し、二重施線にあるように「ヒガゴトニナルガ道理」としている。第五期・第六期との歴史時間は同じである。その理由としては、前掲したように第五期目で「初ヨリ其儀両方ニワカレテヒシク論ジテユリユクホドニ、サスガニ道理ハ一コソアレバ、（中略）シカルベクテ威徳アル人ノ主人ナル時ハコレヲモチイル道理也。コレハ武士ノ世ノ方ノ頼朝マデ歟。」として、鹿ヶ谷事件に始発する廟堂の内紛から源平争乱へ陥っていく王法の動揺を安寧に導いた頼朝を「威徳アル人」と礼讃する慈円の思念に基づいて「武者ノ世」の同時代を概括したことに起因している。

西山で創出されている原『平家物語』の内実は「いくさ物語」で「頼朝の物語」であつて、『愚管抄』付録の「史」の論での「威徳アル人」であつたわけである。

『愚管抄』付録の「史」の論のあとに後鳥羽院の倒幕計画を慈円が率直に諫止する中間部の文章すなわち「諫言」がつづき、付録の後半部の文章すなわち「人材論」であつて、そこには、

後白河院ノ御時ニナリテ、（中略）閑院ニハマチカク公能子三人、實定・實家・實守、（中略）コレラハ、見聞シ人々ヲハ、コレラマデハチリバカリ昔ノニホヒハアリケルヤラムト、ソノ家クノヲホカタノ器量ハヲ

ボヘキ。

（巻七——三三六ページ）

との一節が布置されている。末代澆季に下落したとはいえ、慈円は廟堂の人材として実定の名があがっている。一方、『愚管抄』別帖には後白河院の霊があらわれ、後白河院を祀る廟所を建立すべきか否かをめぐって廟堂では審議されている模様を具体的に、

院へ申テ公卿僉議ニ及テ、ステニイハ、レントスル事アリケリ。萬ノ人皆、「サ候ベシ」ト申タリケルニ、今ノ前右府公継ノ公ゾ、スコシイカヽナド申タルト聞エシヨ、サカシク慈円僧正院コトニタハミヨボシタリケレバニヤ、(中略) 故院ノ怨靈ニ君ノタメナラセ給フニナリ候ナンズルハ、又八幡大菩薩躰ニ宗廟神ノ儀ニ候ベキニヤ。アラタナル瑞相候ニヤ。タゞ野干天狗トテ、人ニツキ候物ノ申事ヲ信ジテ、カカルコト出キ候ベシヤハ。ソレハサル事ニテ、ステニ京中ノ諸人コレヲ承テ、近所ニタチテ候趣、コレヲ聞候ニ、故院ハ下藹近ク候テ、世ノ中ノ狂ヒ者ト申テ、ミコヽカウナギヽ舞ヽ猿樂ノトモガラ、又アカ金ザイク何カト申候トモガラノ、コレヲトリナシマイラセ候ハンズルヤウ見ルコヽチコソシ候へ。(中略) ヤガテ院キコシメシテ、「我モサ思フ。メデタク申タル物カナ」トテ、……

(卷六——二九二ページ)

と叙述している。院を祀る廟所の建立に公卿達は賛同したが、施線にあるように徳大寺実定の子の公継だけが「どうかと思う」と異見をさしはさんだ。二重施線ではひとり反対した公継の見識を受け入れた慈円は不穏な事態に陥っていると後鳥羽院に進言し、院も波線にあるように慈円の見識をめだとある。このことは『猪隈閼白記』建永元年(一一〇六)四月二十一日条に、

後白河院有^(前)託宣事、其間事有沙汰、刑部権大輔仲國妻尔此七八年間有此事、件仲國者後白河院近習者也、可被崇神社之由也、其外他事少々相交、此間頗頼託宣事少々似有符合也、可被崇神社之由此間殊有御託宣也、此事可有議定、仍被召人々、晚景内大臣忠経・春宮大夫公継・中宮大夫公房・堀川大納言兼宗・藤中納言資實・新中納言親経ホ参入、候公卿座云々、(中略) 内府以下各被崇神社之條可宜之由申之、但春宮大夫先有御祈請之後可有沙汰之由経申之、各無別子細、其後人々退出、

とあるように、建立を要求した託宣に賛同する意見を議奏するとの大方の意向に対して施線では、ただひとり公

継だけが慎重に対処することを主張した。『明月記』同月二十日条に「群議の日、公継卿申す旨、殊に御意に叶ふと云々。(中略)感涙抑へ難し。」とあり、識見の高い公継に九条家に仕える定家もやはり感動していた。

『愚管抄』では実定・公継の父子を礼讃しているからには、慈円が徳大寺家に親愛の情を寄せているのは看過できない。

(五) 徳大寺実定と源頼朝そして東国の武士

建久二年(一一九〇)閏十二月十六日に薨去した実定をめぐって、『吾妻鏡』同年閏十二月二十五日の条に、

廿五日 己巳 梶原刑部丞朝景申して云はく、去ぬる十六日の夜、左府禪閣 實定公、薨じたまふ。年

五十三と云々。幕下殊に嘆息したまふ。関東に由緒ありて、日來これを重んぜらるるところなり。梶原は

また朝景・景時共にもつてかの恩澤に浴すと云々。

とあつて、施線では幕下すなわち頼朝がことのほか実定を悼んでいる。それは、実定との関係が親密であつたことによつていゝる。また二重施線にあるように頼朝の寵臣である梶原景時・朝景兄弟ともどもが、実定から恩顧をうけていたからであつた。

実定と頼朝との関係をめぐつてまずみていこう。

在位している後白河院の同母姉の上西門院統子は、准母として皇后に冊立された際に、『兵範記』保元三年(一一五八)二月三日の条に、

三日 甲子 天晴、有立后事、

(中略)

有宮司除目、

権大夫従三位藤原実定、兼左近中将

(中略)

権少進正六位上源頼朝

とある。除目があつて、従三位にして左近中将に実定、頼朝は正六位上に任命された。『兵範記』同年八月一日条に「皇后宮大夫実定」とある。翌年十二月二十六日に勃発した平治に乱で伊豆に頼朝が流罪されるまでの僅か一年余にすぎなかつたが、廟堂で颯爽と振る舞う三十歳の実定のもつて十二歳の頼朝は下僚として仕え、親愛の情を寄せており、実定と懇意の仲になつていく発端は、廟堂での主従の交わりなのである。²⁶⁾前掲の縁戚関係図から判然とするように実定の父である公能の女は、一条能保の母であつた。能保の妻は頼朝の同母妹であり、能保は源平の争乱を経て廟堂との交渉の役割を担う。「武者ノ世」を領導し始めた頼朝の後押しで官位がすすみ、建久二年(一一九二)二月には檢非違使別当、建久四年正月には従二位へと能保は急速に昇進していく。他方、『玉葉』寿永二年(一一八三)閏十月二十三日条に「巳の刻觀性法橋来たりて云はく、少将公衡大宮権亮能保(頼朝妹の夫なり)の縁(公衡の妹の夫)に依り、」とあつて、西山の往生院院主の觀性と交わっている。ことに施縁は看過できない。徳大寺実定と縁戚関係があるからである。

前掲した『吾妻鏡』建久二年(一一九二)閏十二月二十五日条の二重施縁に梶原景時・朝景兄弟が「恩澤に浴す」と記載されている。それは、往時に在京していた景時が徳大寺家に奉仕し、実定から和歌を学んでいたのも理由であつた。²⁷⁾さらに本郷恵子は「朝景・景時は実定と幕府とをつなぐ役割を果たしていたと思われる。」と推定し、『古今著聞集』成立は実定の子である公繼のサロンに多く負っていたとも論じている。²⁸⁾このような人的ネットワークから実定が物語化される理由が分明になる。

次に「武者ノ世」を領導し始める頼朝から実定との親交を窺つていこう。

『吾妻鏡』文治元年(一一八五)十二月六日条には、平家一門が滅亡したので、頼朝は後白河院に折紙を上呈した。内容は議奏公卿を設置して、重要な朝務を合議して奏上する公卿の意向で政治をすすめることを頼朝は求めたのであつた。その公卿とは兼実・実定・実房・宗家・忠親・実家・(源)通親・経房・雅長・兼光であつた。『愚管

抄』にも九条兼実の内覧宣旨に関連して「コノ頼朝(中略)議奏ノ上卿トテ申タリケル」(巻五——二七〇ページ)とある。その翌年の廟堂と幕府の動向を叙述した慈円は、『愚管抄』のなかで、

九條右大臣ハ、文治二年三月十二日、ツイニ撰政詔、氏長者ト仰セ下サレニケリ。去年十二月廿九日ヨリ内覧臣許ニテ、ワレモ人モ何トモナク思テアリケルニ、カクサダマリニケレバ、世ノ中ノ人モ、ゲニクシキ撰録臣コソ出キタレト思ヘリケリ。サテ右大臣イハレケルハ、「治承三年ノ冬ヨリ、イカナルベシトモ思ヒワカテ、(中略)十年ノ後ケフマチツケツル」トイワレケリ。(中略)又頼朝関東ヨリヤウクニメデタク申ヤクソクシテ、世ノヒシトヲチヒヌト世間ノ人モ思テスギケリ。(巻六——二七三ページ)

とした。二重施線部にあるように治承三年十一月以降の極端に廟堂が疲弊しはじめたとの兼実の回顧談を摘記。そのことは、すでに、兼実は「九條ノ大臣兼実ハ右大臣ニテ法性寺殿ノ三男、サ、イナクテ、天下ノ事預ニ顧問ニテ、兵杖ノ大臣ニテ候ハレシヲコエテ、」(巻五——二四八ページ)として、十二分に執政の「臣」に就く資格者であつたにもかかわらず、施線で廟堂を壟断した清盛によつて遮られたと叙述していた。そのことをもとに、十年の歳月が経過してしまつたと兼実自身の回顧談を添えたのであつた。その後には二重施線にあるように王法に参入した頼朝との連携が築かれたことで、王法が安寧になつたと説論している。したがつて、右文の二重施線部の「イカナルベシトモ思ヒワカテ」の述懐した兼実の言辞の基底には、福原遷都後の「旧キ都ヲ来テミレハ浅芽カ原トソ荒ニケル……」との実定の今様に象徴される治承四年(一一八〇)八月十五日の夜、公的には「月見」の年中行事が行なわれていない模様、すなわち危殆に瀕してしまつている時局が見事に物語に仕組まれている。それ故、つづく二重傍線部の「十年ノ後ケフマチツケツル」トイワレケリ」の言辞には、本物語の内実である「頼朝の物語」を踏まえながら、前章でふれたように『愚管抄』に於いて、以仁王の発布した令旨を見た流人の頼朝が「世ノ事ヲフカク思テアリケリ。」と述懐させて、頼朝の旗揚げへ及ばせた叙述を踏襲しながら、さらに「サレバヨコノ世ノ事ハサ思シモノヲ」トテ心オコリニケリ。」(巻五——二五二ページ)と頼朝の心情を明記していたことと相即する。以降では頼朝を叙述の正面に押し出していく。すなわち、治承寿永の内乱を勝ち抜き、平家一門

を族滅させて廟堂が安寧に導いた頼朝を跡づけるわけである。そのため兼実が摂政に就いた文治二年（一一八六）三月までの歴史時間を横断させていく論理が、当該の『愚管抄』の文章にある二重施線「治承三年ノ冬ヨリ、イカナルベシトモ思ヒワカデ……、世ノヒシトヲチヒヌ……」に示されているわけである。この二重施線部の前にある波線から判然とするように執政の「臣」には就くまでは右大臣であったわけだが、この度の文治二年三月の人事異動で左大臣に昇進、兼実は華やきはじめる。後任の右大臣には実定が就く。今後の幕府と調整していくための布石になると思つていた頼朝が実定の昇進を推挽したのであつた。そのことを慈円圈に顧慮してみておう。

文治五年（一一八九）には実定はさらに高位の左大臣に転じ、その翌年には三十年ぶりに頼朝は上洛する。その事象を『愚管抄』に、

サテスグルホドニ、文治ハ六年ト云四月十一日ニ、改元ニテ建久ニ成ニケル。元年十一月七日頼朝ノ卿ハ京へ上リニケリ。ヨノ人ヲソニタチテマチ思ケリ。六波羅平相國ガ跡ニ、二町ヲコメテ造作シマウケテ京へイリケル。キノフトテ有ケル。雨フリテ勢田ノ辺ニトゞマリテ、思サマニ雨ヤミテ、七日入ケルヤウハ、三騎くナラベテ武士ウタセテ、我ヨリ先ニタシカニ二百余騎アリケリ。後ニ三百余騎ハウチコミテ有ケリ。コムアヲニノウチ水干ニ夏毛ノムカバキマコトニトヲ白クテ、黒キ馬ニゾノリタリケル。其後院・内へ参リナンドシテ、院ニハ左右ナキ者ニナリニケリ。（中略）イカニモくイカニモ末代ノ將軍ニ有ガタシ。
ヌケタル器量ノ人ナリ。

（巻六——二五〜二六ページ）

とあるように、二重施線にあるように当為の武將の頼朝として礼讃しており、その以前の施線部では頼朝に率いられている武士の「武」の威容を精彩に叙述していた。つづく波線部では廟堂に参上した頼朝は、治天の「君」である後白河院にとつても素晴らしい者となつていと明記している。院が即位したのは久寿二年（一一五五）、保元三年（一一五八）に十二歳の頼朝が初出仕して三十歳の実定と主従関係を築いていた。遙か四十年以前の往時を懐かしみながら実定と頼朝とが懇談したのはいうまでもない。平治元年（一一五九）の乱で父の源義朝は敗死、

頼朝は流罪されてしまった。この年、慈円は五歳であった。二歳で母を十歳の時には父藤原忠通とも死別している慈円は、安元二年（一一七〇）より治承三年（一一七九）頃の成立である『述懐百首』なかで、

みなし子のたくひおほかる世なれともたた我のみと思しられて (二〇五)

と自己の境遇を詠じた。上の句には「孤児は多いが」とあるからには、平治の乱で父の義朝とは死別し、流人となつて母とも生き別れてしまったあと、「みなし子」となつて伊豆に配流されてよりの頼朝の半生も慈円は想起していたかも知れない。

後年、廟堂で執政の「臣」である甥の九条良経が頓死、程なく兼実も寂して家運の後退をはかなんで、慈円は西山に隠棲する。程なく良経の女の立子が入内する慶事があつた。その西山の空間に慈円圈を組織して、原『平家物語』の「いくさ物語」企画・創出させていく。本物語の内実は「頼朝の物語」であつた。そのようになった淵源に、慈円は孤児となつた我が人生を頼朝の境遇とを重ね合わせることがあつたとも推測されよう。

(六) 今様の蔓延とアンビバレンス

「武者ノ世」の始発の武力衝突で勝利した後白河院は、保元三年（一一五八）八月、院政という政治形態を機能させていく。上皇政治である。そのため二条・六条・高倉・安德そして後鳥羽の五代の在位した廟堂に君臨する。他方、傀儡女の乙前と邂逅した保元二年（一一五七）頃より院の御所の法住寺で今様の会をひらき、初度の永暦元年（一一六二）の熊野参詣で、後白河院は、

熊野の権現は 名草の浜のこそ降りたまへ 若

の浦にしましませば 歳はゆけども若王子 (二五九)

と熊野権現を讃えて、今様という声・わざを「現実空間と神の空間との両者を繋ぐ結節点」とみたてて振る舞つている。⁽²⁰⁾「武者ノ世」を生き抜いた後白河院をみてみよう。「我が身、五十余年を過ごし、夢のごとし幻のごとし。」中

略)今様をうたふとも、などか蓮台にあずからざらむ。(中略)世俗文字の業、ひるがへして讚仏乘の因、などかは転法輪とならざむ。」「(梁塵秘抄口伝集)卷一〇・(二九)と院はこれまでの自分の人生を慈円の揚言する「冥顕二法」の道理に通じるような思いで回顧している。一方、『愚管抄』にも「四宮ニテ後白河院、待賢門院ノ御ハラニテ、(中略)イタクサタ、シク御アソビナドアリトテ、」(卷四——二六ページ)とみえており、周知のように院政を始発させる以前のはるか昔、皇子の頃より今様の遊芸に夢中になっており、「大方コノ法皇ハ男ニテヲハシマシ、時モ、袈裟奉リテ護摩ナドサヘ行ハセ給テ、(中略)ツネハ舞・猿楽ヲコノミセサセツ、ゾ御覽ジケル。」(卷六——二七八ページ)とあつて、波線で仏事善行をしながらも舞や猿楽をたいへん愛好したと『愚管抄』にみえるので、慈円は今様に耽溺してきている後白河院を知悉していた。『梁塵秘抄』に、このような院の人生の歩み方には、

狂言綺語の誤ちは、仏を讚むるを種として、麤

き言葉もいかなるも 第一義とかにぞ帰るなる

(二二二)

とやはりみえ、詩歌管弦の「あそび」は仏道の悟りにつながると今様にうたわれている。そのことに起因しているよう。『愚管抄』の二重施線部から判然とするように、年を重ねて成人になっていくにつれて後白河院は狂言綺語観に衝き動かされていく。狂言綺語観とは『今鏡』にもあり、紫式部墮地獄説をもとに白楽天を引き合いに出して菩薩が「女になり給ひて、法を説きてこそ、人を導き給ふなれ」(卷一〇・作り物語の行方)としている。この『今鏡』の言説をも直視して慈円が藤原行長・宇都宮入道蓮生等の学才や文才のある人材を西山の空間に集めて、「あそび心」から原『平家物語』の『治承物語』を企画・創出させた事情と、院が『愚管抄』の施線にあるように「御アソビ」をし、成人した後白河院が『愚管抄』にやはりみえる「ツネハ舞・猿楽ヲコノミセサセツ、ゾ御覽ジケル」所業とは共通しよう。そのことを具体的にみていくと、西山に慈円圏を組織していた建保六年(一一二八)頃の「賀茂百首」序の、

……和歌者我朝之風俗也、吟詠者雅意之所作也、今染二蹄之色於意識、忽著三業之悟於法樂、狂言又狂言綺、此声是観音実語亦実語、……

との言説にいきあたるだろう。二諦一如すなわち絶対的真理の真諦と世俗的真理の俗諦の道理に則って、日本の風俗である和歌は狂言であるけれども、その声は観世音菩薩の偽りのない真実の言葉であると慈円は刻んだのであった。

今様に、

大峰行ふ聖こそ あはれに尊きものはあれ 法

華経誦する声はして 確かの正体まだ見えず

(二八九)

があり、『法華経』読誦の尊さをうたっているが、建久三年(一九二)三月の後白河院の崩御に関連して『愚管抄』には「法華経ノ部数ナド、数万部ノ内二百部ナドニモヲヨビケリ。(中略)御イモウトノ上西門院モ持経者ニテ、イマスコシハヤクヨマセ給ケレバ、ツネハ誦アイマイラセンナド仰ラレケリ。」(巻六―二七八ページ)とみえており、後白河院は『法華経』への信仰も尋常ではないとし、施線にあるように院の妹の「上西門院」こと統子(二二六―二八九)は院よりも早く読誦できる篤信の人であったと慈円は弁えていたからであった。

後白河院を祀る廟所の建立に「世ノ中ノ狂ヒ者ト申テ、ミコ・カウナギ・舞・猿楽ノトモガラ」(巻六―二九二ページ)が賛成したと『愚管抄』で慈円が摘記していた。当時の治世の実相から、さらに今様が物語化に如何に関わるかを具体的に窺っている。

清盛の葬儀に関連させて『百鍊抄』養和元年(二二八)閏二月八日に「八日葬禮、寄レ車之間、東方有レ今様乱舞声一、州外諸國、以レ人令レ見レ之。」とある。前年の福原遷都の断行をはじめとする清盛の暴挙への怨嗟が、洛中の三十人に及ぶ人々の今様をうたう乱舞となつて現出したのであった。各階層に蔓延している今様が、「又治承四年六月二日忽ニ都ウツリト云事行ヒテ、都ヲ福原ヘ遷テ行幸ナシテ、トカク云バカリナキ事ドモニナリニケリ。」(巻五―二五〇ページ)としているので、王法の危殆へ陥れた清盛への意趣返しの意味をこめてうたわれた。一方、本物語では今様をうたう実定の形象に直結しているのが「其ノ比福原ニ八人々ノ夢ニモ悪ク心騒キシテ、怖

キ変化ノ物共多カリケリ。(中略)其ノ比源中納言雅頼ノ許ニ候ける青侍ノ見タリケル夢モ、不思議也。(屋代本・卷五「福原怪異事」)であつた。物語の基幹には節刀思想があり、節刀が清盛から源氏へ移ることを黙示したのである。

『平家物語』諸本の異同からみると、屋代本は清盛から頼朝へ政権が移譲されるのに対して、延慶本では九条家の子弟の將軍就任までを予告している。これは、原『平家物語』の『治承物語』が屋代本に遺存している証憑といえよう。そのうえ新都の福原では「又後ノ園ニ大木ノ倒ルル音シテ、四五十計カ声ニテトツト咲ク声シケリ。」(屋代本・卷五「福原怪異事」)とあり、清盛が死病の床に就いた場面には「高キモ賤モ聞レ之ヲ、「アハ、シツルハ」トソ申ケル。(中略)……頼朝力首ヲ刎テ、懸ヨ三塚上」ソレソ孝養ニテ有ンスル」ト宣ヘハ、弥罪深ク聞ケル。天ノ責難レ遁シテ、「(屋代本・卷六「入道病息事 同被葬事」)とある。前掲した「百鍊抄」養和元年(一一八一)閏二月八日条の「東方有今様乱舞声」¹⁾、州人誦声²⁾」としてゐる。延慶本は清盛の葬儀の日に「サテモ其夜、六波羅ノ南ニアタテ、二三十人計ガ音シテ舞踊者有ケリ。「ウレシヤ水」トイフ拍子ヲ取テヲメキ叫テ、ハヤシ匂、ハト咲ヒナムドシケリ。」(三本・一三「大政入道他界事 付様々ノ怪異共有事」)とあつて、さまざまな怪異や関連の記事が綿綿としてつづき「大方サマ々ノ不思議共有ケリ。」と括つてゐる。屋代本の方が平淡であらう。

後白河院は新たな王権維持の装置として、今様をおおいに機能させ、統治の具にしたのであつた。「今様をはじめとする遊興」は祝祭の場での文化であり、政治性を意識していたのである。³⁾本物語に組み込まれた「鹿ヶ谷事件」の成親をはじめとする年中行事の五節の淵醉で今様がうたわれた頃の「十余歳の時より今にいたるまで、……」(『梁塵秘抄口伝集』卷一〇・二三)の世をへて「そのち、鳥羽院隠れさせたまひて、物騒ぎしきことありて、……」(『梁塵秘抄口伝集』卷二〇・四)とあるように、保元の乱が勃発した三十歳より治天の「君」となつていく院の

生涯そのものは「武者ノ世」であつて、慈円圈で創出された本物語そして『愚管抄』の展開とその内実と一致する。三十四歳になつた後白河院がはじめて熊野参詣した際のことを次のように回顧している。すなわち、

我、永曆元年十月十七日より精進はじめて、法印覺讀を先達にして(中略)先達の夢に、「このたび参らせたまふはうれしけれど、古歌を賜はぬこそ口惜しけれ」と見たる由を申す。「もとより、王子にては、す

る事をばするに、御歌などは、あるべきものを」など言ふ者ありしかど、「あまり下臈がちにて顕証にや」など言ふ者もありて、ありしほどに、かく夢のことを聞きて、左右なく歌はむとて、厩戸を夜深く発ちて、長岡の王子に夜のうちに参りぬ。相具したりしは、太政大臣清盛、大弐と申しし折なるべし。参りあひてありしに、この夢を言ひ合はせしかば、「さる事候はば、さにこそ候ふなれ。沙汰に及び候はぬ」由を返事に申し、心のうち、「いたく雑人など数多ありて、いかが」と思ひけるほどに、さと寝入りたりけるに、束帯したる御前具して、唐車に乗りたる者、御幸のなるやらむとおぼしくて、王子の御前に立てたり。この歌を聞くにかと思ひて、きと驚きたるに、今様を或る人出だしたり。……〔梁塵秘抄口伝集〕巻一〇・(八)であつて、主旨は、先達の覚讀が後白河院の今様を神が望んでいる夢と清盛が後白河院のうたつて今様を聞いている神の夢をみたというのである。「同行している太宰府次官で当時は四十二歳であつた清盛に相談されたところ」「そのようなことでしたら、お歌いになるべきです」と返事し、そのうち寝入つた清盛が院の今様を聞いている夢をみた、というわけである。この内容からは、後白河院に信任されている清盛が看取されよう。『愚管抄』のなかで院政を敷くことに懸命になつて後白河院と親政を行なおうとする二条天皇との間で「清盛ハヨクくツ、シミテイミジクハカラヒテ、アナタコナタ」(巻五——三九ページ)として、院と天皇との両方に振る舞つている清盛に近い人物像が浮上している。

現存『平家物語』諸本ともに冒頭では、周知のように「驕レル心」が超過している清盛を語り、最初の「殿上闇討」の章段では父の忠盛が文武の技量に長けていたと語つて、平家一門が興隆していく経緯を押し出す。が、「殿下乗合」以降からの各章段では、冒頭で評していた「間近クハ入道前ノ太政大臣平ノ朝臣清盛ト申人ノ有様ヲ、伝ヘ承ルコソ心訶モヲヨハレネ。」(屋代本・第一「忠盛昇殿事」)として清盛の暴虐な人物を仕組んではいく。そのため「伊豆国ノ流人、前右兵衛佐頼朝カ首ヲ見サリツル事コソ無ニ本意ニケレ。」(屋代本・第六「入道死去」)と変革期を生き抜いた棟梁にふさわしい強烈な個性が象られている。自己の法要追善より頼朝追討を優先するように遺言しており、頼朝に対して一歩も譲ろうとしない「驕レル心」とも異なる強烈な清盛の最期を捉えており、「最後ノ

病ノ有様コソ心憂ケレトモ、更ニ只人ニテハ無リケリト覺ル事ノミ多リケリ。何ヨリモ福原ノ経島築テ、今ニ至マテ上下往来ノ船ニ無レ煩コソ目出ケレ。経ノ島ト申ハ、石面ニ一切経ヲ書テ被レ築タリケル故ニコソ、経ノ島トハ申ケレ。大方敬ニ神祇ニ崇ニ仏法ニ給事、人ニハ勝レ給ヘリ。」(屋代本・第六「入道相国病患事同被覺事」)としている。施線では福原に経島を築造して航行の不安を解消させたのは賞讃に値するとし、二重施線で清盛を篤信の人であったとしてゐる。この寸言は延慶本・四部合戦状本・長門本・盛衰記・中院本等にもあるので、西山の慈円圈で「あそび心」から構想されて、すでに原『平家物語』の『治承物語』にあつた言辭であろう。そのことは波線部で死の瞬間まで頼朝に敵対心を燃やし続ける清盛として象つてゐるからである。「旧キ人ノ申ケルハ、」として、父の忠盛は白河院の愛人祇園女御とは知らずに、女御に歌をよみかけ、彼の秀歌が『金葉集』に入集、白河院の目にとまる。院が祇園女御のもとに行幸したおり、怪しい者を殺さずに素手で捕らえ、無駄な殺生をせずに済んだことを褒められ、身ごもつてゐる女御を忠盛は賜つた。その子こそが清盛であつたとの説話を添えて、「サレハ今ノ清盛モ、正シク白河院ノ御子ニテ、都遷ナントヲモ輒ク被ニ思立ニケルニヤ。コトハリ成」トソ人申ケル。」(屋代本・第六「祇園女御」)との世評を付した。この王法の事象とともに仏法の牙城からも「此入道相国ト申ハ、慈恵大僧正ノ化身成ト云ヘリ。」(屋代本・抜書「入道相国為慈恵大僧正化身事」)として、第十八代天台座主の再誕と清盛を「冥」の側から捉えてゐる。アンビバレントな修辭が介在してゐる。右文の波線部の「只人ニテハ無リケリ」との清盛との寸言にも配意したならば、『愚管抄』の論理とも相即する。このような清盛像は、慈円が企画・創出させた当初の段階で造型されてゐたと思われる。

「頼朝の物語」であつた本物語が、治承年間からの仏法と王法とが纏綿して動揺する時局のもとで、荒廃した廟堂の模様を実定が「旧キ都ヲ来テミレハ浅茅力原トソ荒ニケル月ノ光ハクマナクテ秋風ノミソ身ニハシム」(屋代本・巻五「徳大寺左大将実定卿旧都近衛河原皇太后宮大宮御所被参事」)とうたう今様の音声の響きは、源平両軍の雄叫び、すなわち「源平時ヲ作ル。其声、上ハ梵天マテモ聞ヘ、……」(屋代本・巻十一「鷄合壇浦合戦」)、つづく壇ノ浦の海戦で源氏軍の歡呼の声へと収斂していく。

西山の慈円圏で創出されている本物語の展開に照らして、「旧キ都ヲ来テミレハ……」(屋代本・巻五「徳大寺左大将実定卿旧都近衛河原皇太后宮大宮御所被参事」)とつたう実定の今様には、『愚管抄』の付録前半の「史」の論に於いて、人皇初代の神武天皇より八十二代後鳥羽天皇の在位している建久九年(一一九八)までを全七期に分けて、その第五期目で「初ヨリ其儀両方ニワカレテヒシク論ジテユリユクホドニ、サスガニ道理ハ一コソアレバ、(中略)シカルベクテ威徳アル人ノ主人ナル時ハコレヲモチイル道理也。コレハ武士ノ世ノ方ノ頼朝マデ歟。」(巻七——三三五—二六ページ)としていく慈円の論理が通底してあるであろう。

「旧キ都ヲ来テミレハ……」と「月見」の章段でうたう実定の今様は、頼朝を礼讃していく発端の逆説的な修辞でもあった。

おわりに

王法が危殆に瀕している最中に徳大寺実定は、『庭槐抄』をしたため、そのなかで「是偏狂申令レ然歟。可レ恐可レ恐。」(治承二年四月二九日)・「奇怪云々。」(寿永二年六月二五日)等として、廟堂の綱紀弛緩の有様を悲憤慷慨していた。『愚管抄』付録で治世を全七期の区分をした慈円は、その第六期で「無道ヲ道理トアシクハカライテ」・「ヒガゴトニナルガ道理ナル道理ナリ」・「ヲチクダル時ドキノ道理ナリ」と執拗に繰り返し「コレ又後白河ヨリコノ院ノ御位マデカ」として(巻七——三三六ページ)と概評している。『今鏡』が語り終えた嘉応二年(一一七〇)のあとを引き継ぐ「世継物語」である原『平家物語』の『治承物語』のなかで、

「……清盛力角心ノマ、ニ振舞事コソシカルヘカラネ、是モ只代ノ末ニ成テ王法ノ尽ヌル故」と思召ケレトモ、次ナケレハ御誠モ無リケリ。平家モ強ニ朝家ヲ可レ奉レ恨事モ無リシニ、世ノ乱レソメケル始ハ、嘉応二年十月十六日、小松殿次男新三位中将資盛、……

(屋代本・巻一「資盛朝臣殿下松殿乗合事」)

とあって、施線のように現今の王法の模様を後白河院に慨嘆させているのと相即するであろう。そして二重施線

では「やがて世の乱れはじめる根本となる事件が引き起こされた」と評して、清盛による執政の「臣」藤原基房らへの暴挙へと物語を展開させていく。そのことを『愚管抄』では「サル不思議アリシカド」・「コノフシギコノ後ノチノ事ドモノ始ニテ」(巻五——二四七ページ)と畳み掛けて源平の争乱へ及ぼせていくのと照応する。³²⁾そして「大上入道人臣ノ身トシテ被レ遷シキ。「是八国々ノ異賊攻登リ、平家都ニ跡ヲト、ス可レ交ニ山林ニ前表カ」トソ人申ケル。」(屋代本・第五「福原遷都事付代々諸国所々都遷事」として、清盛による遷都を詰った段階で源氏の武士によつて都落ちをする平家一門の運命を予言する世評を添えることになる。

『愚管抄』では、

……コノ小松内府ハイミジク心ウルハシクテ、父入道方謀反心アルトミテ、「トク死ナバヤ」ナド云ト聞ヘシニ、(中略)嘉應二年十月廿一日高倉院御元服ノ定ニ参内スル道ニテ、武士等ヲマウケテ前駆ノ本鳥ヲ切テシナリ。コレニヨリテ御元服定ノビニキ。サル不思議アリシカド世ニ沙汰モナシ。次ノ日ヨリ又松殿モ出仕ウチシテアラレケリ。コノフシギコノ後ノチノ事ドモノ始ニテアリケルニコソ。

(巻五——二四六〜四七ページ)

となつている。まず波線部では重盛と讃えつつも、本物語では執政の「臣」の基房らへの清盛の暴挙を、史実から重盛の報復としてことわっている。が、施線は『愚管抄』付録の「清盛公方後白川院ヲワロガリマイラセテ、ソノ御子、御孫ニテ世ヲ、サメントセシヤウ、(中略)ミダス方ハ謀反ノ義ナリ。ソレハスエトナル道ナシ。」(巻七——三四七〜四八ページ)との論理で慈円は把捉し、清盛の「オゴリ」(巻五——二五三ページ)を押し出していく。道理から、右文の「コノフシギコノ後……」は、『愚管抄』の頼朝拳兵の事象をもとに批評した二節の「……伊豆ハハ流刑ニ行ヒテケルナル。物ノ始終ハ有レ興不思議也。其時モカ、ル又打カヘシテ世ノ主トナルベキ者也ケレバニヤ、」(巻五——二五二〜五三ページ)と評しているのと照応しよう。慈円の道理史観と物語の展開とは軌を一にしている。これ以外にも物語では「殿下乗合」に直結させて「主上御元服ノ定メ、其夜ハ延ヒヌ。」(屋代本・巻一「主上高倉院御元服事」)の章につづけて、

其比妙音院ノ太政大臣、内大臣左大将ニテ御坐シケルカ、大将ヲ辞申サセ給ケリ。時二徳大寺大納言実定卿、其処ニ当リ給ヘル由聞ユ。
(屋代本・第一「新大納言成親卿以下謀反事」)

とあつて、当時もつとも適任は実定であると思われていたが、清盛の子の宗盛が近衛大将になった。そのため、結局、実定は、

中二モ徳大寺大納言実定卿ハ、一ノ大納言ニテ、花族英雄、才覚優長ノ上、家嫡ニテ被レ越ヘ給フ、遺恨ナル。「御出家ナントモヤアランスラム」ト人申ケレトモ、暫ク世ノ成ン様ヲ見ントテ、大納言ヲ辞申テ籠居トソ聞エシ。
(屋代本・第一「新大納言成親卿以下謀反事」)

とあるように、官位を越えられた衝撃で出家するであろうと人々は噂したが、二重施線にあるように「しばらく世の中の成り行きでも見よう」と考えた実定は大納言を辞任して籠居したと展開させている。右文の物語の二重施線は、はじめて『愚管抄』で頼朝が正面に据えられた箇所、

サテカウ程ニ世ノ中ノ又ナリユク事ハ、三條宮寺ニ七八日ヲハシマシケル間、諸國七道ヘ宮ノ宣トテ武士ヲ催サル、文ドモヲ、書チラカサレタリケルヲ、モテツギタリケルニ、伊豆國ニ頼義朝ガ子頼朝兵衛佐トテアリシハ、世ノ事ヲフカク思テアリケリ。
(卷五——二五二ページ)

とあるのと類同していよう。二重施線では深謀遠慮している頼朝の心情には、西山隠棲時に『慈鎮和尚夢想記』を起草して武將頼朝が王法に参入することを穎悟して、西山で程なく本物語を企画して創出させた慈円自身の思念が投影していると思われる。³³⁾

『愚管抄』別帖の冒頭で「保元ノ乱イデキテ後ノコトモ、マタ世継ガモノガタリト申モノヲカキツギタル人ナシ。少々アルトカヤウケタマハレドモ、イマダエミ侍ラズ。ソレハミナタゞヨキ事ヲノミシルサントテ侍レバ、保元以後ノコトハミナ乱世ニテ侍レバ、」(卷三——二九二ページ)とし、廟堂に進出してくる武士を叙述していく。治承四年(一一八〇)八月の頼朝挙兵に及ばせて「武者ノ世」の王法を静謐に導いた頼朝の「武」を礼讃し、

九條右大臣ハ、文治二年三月十二日、ツイニ撰政詔、氏長者ト仰セ下サレニケリ。去年十二月廿九日ヨリ

内覧臣許ニテ、(中略) 又頼朝関東ヨウヤウク、ニメテタク申ヤクソクシテ、世ノヒシトヲチヒヌト世間ノ人モ思テスギケリ。
(巻六——二七三ページ)

としている。二重施線にあるように九条兼実と連携している頼朝を道理と揚言したのであった。

新都福原にいた実定は旧都の京に向き、妹の多子のいる「御所」を訪ねて「待宵の小侍従」を呼び出して、

……実定卿、其御所へ参テ、待宵小侍従呼出シ、古へ今ノ物語シ、サ夜モ漸々深行ハ、ヤウチャウノ音取朗詠シテ、旧都ノ荒行ヲ、今様ニコソウタハレケレ。

旧キ都ヲ来テミレハ浅芽力原トソ荒ニケル

月ノ光ハクマナクテ秋風ノミソ身ニハシム

ト、推返く二三反ウタヒスマサレタリケレハ、……

(屋代本・巻五「徳大寺左大将実定卿旧都近衛河原皇太后宮大宮御所被参事」)

と今様をうたう実定の形象には、雄叫びと馬蹄の響かせる「源氏勢ハ重ナレハ、平家勢ハ落行。(中略) 源平時ヲ作ル。其声ハ、上ハ梵天マテモ聞へ、下ハ海竜マテモ驚覽トゾ覺タル。源平乱合テ数刻戦ニ、白雲一村源氏ノ上摩テ……」(屋代本・巻二「長門国壇浦合戦事」)に至る、いわば源平両軍の激突から源氏軍の勝利の「組曲」への不可欠な「前奏曲」であつたといえるであろう。西山の慈円圈で創出させた原『平家物語』の『治承物語』の内実は「頼朝の物語」であつたからである。^[3]西山の慈円圈では直視していた『今鏡』には、

右大臣公能のおとど(中略) 声もうつくしく、蔵人大少将などいひて、五節の淵酔の今様などに、権現うたひ給ひける。
(藤波の下・第六「花散る庭の面」)

とあつて、大治六年(一一三二)には「権現」という難しいうえに珍しい曲をうたつて、徳大寺実定の父が廟堂の宴会を盛り上げている。公能は今様の名手であつた。また人々の信仰心を高揚させる面が今様に内在していたので、居合せる空間での互いの関係性が生まれ、「共感」「一体感」を惹起させていく。そのことを沖本幸子は「一人の人間の心の嘆きが今様詞章の一部に乗り移り、場の空気を集めて、(中略) 一つの統一された世界を現出させ

ていく。(中略)院自身が歌う今様が重なっているばかりではなく、その先に神の示現を確信し得るものであったと思われる。」と論じている。⁽³⁵⁾このような後白河院の在世の当時に宮廷歌謡として定着していた今様の特性を十二分に弁えながら、徳大寺家を壇越としている西山の宗教的な空間で本物語が創られていったのである。そうであるから、旧都となった京の月を見ようとして「御所」を訪ねた実定が今様をうたう形象は、頼朝が挙兵する前夜の「御所」すなわち「王法」そのものの模様を見事に捉えたのであった。

本物語では、元暦二年(一一八五)三月の壇ノ浦の海戦を描いて、

同三月廿四日卯刻ニ、長門国檀浦赤間関ニテ、源平矢合トソ定ケル。(中略)サル程ニ、源平乱合テ数刻戦ニ、白雲一村源氏ノ船ノ陣ノ上聳テ見ケルカ、雲ニテハ無リケリ。無レ主モ白幡一流舞下テ、源氏ノ舟ノ舳崎ニ、棹付ノ緒ノ付ク程ニ見テ、又空ヘソアカリケル。兵共見レ之ヲ、急キ手水ウカヒヲシテ、是ヲ拜奉ル。サレ共、今日源氏負軍ト見ヘタリケル処ニ、此瑞相ヲ見奉テ、「是程ニハ八幡大菩薩ノ守護セサセ給ハシスルニ、何テカ不レ勝ヘキ」トソ勇合ケル。

(屋代本・第十一「長門国檀浦合戦事」)

としており、白雲のように見えた大空に漂っていたものが、じつは雲ではなく、白旗の一流れ、空から舞い降りてきて、源氏の船の舳先にふれるほどにみえた。それを八幡大菩薩の顕現と喜悅したといい、冥衆による勝利の予告と判断して源氏軍は奮起したという。一方では、『愚管抄』で、

平氏ノアト方ナキホロビヤウ、又コノ源氏頼朝將軍昔今有難キ器量ニテ、ヒシト天下ヲシツメタリツルアトノ成行ヤウ、人ノシワザトハヨボヘズ。顕ニハ武士ガ世ニテアルベシト、宗廟ノ神モ定メヲボシメタルコトハ、今ハ道理ニカナイテ必然ナリ。

(巻六——三〇四ページ)

とあって、平家軍を滅ぼして「武者ノ世」を領導する源頼朝を讃えたあと、施線で宗廟神すなわち国家の祖神である八幡大菩薩の計らいと説諭する。本物語と構造は同質である。

治承四年(一一八〇)八月十五日の「月見」の章段を仕組んで、この年中行事をもとに荒んでしまっている廟堂を象徴させている。他方では実定が今様をうたう形象を通して、源平の武力衝突へ及ばせ、源氏軍が勝利する伏

線なのである。本物語の内実は「頼朝の物語」であるからには、前掲の、

……此瑞相ヲ見奉テ、「是程二八八幡大菩薩ノ守護セサセ給ハンスルニ、何テカ不_レ勝ヘキ」トソ勇台ケル。施線部の一節にある源氏の武士達が奮い立つ声は、平家軍を滅ぼしてあとの歓声へとつながっていく。それ故に、屋代本『平家物語』にあるような「月見」の章段のかたちで、原『平家物語』の『治承物語』の枢軸に据えられていたと思われる。

【末尾】

〔引用資料の典拠〕

『愚管抄』は『日本古典文学大系』（岩波書店）、『梁塵秘抄』は『新編日本古典文学全集』（小学館）、『玉葉』は高橋貞一著『訓読玉葉』（高科書店）、『明月記』は今川文雄『訓読『明月記』、覚一本』『平家物語』は『新日本古典文学大系』（岩波書店）、延慶本『平家物語』は『校訂延慶本平家物語』（汲古書院）、屋代本『平家物語』は『屋代本高野本対照・平家物語』新典社、四部合戦状本『平家物語』は『訓読四部合戦状本平家物語』（有精堂）、『今鏡』は『講談社学術文庫』、慈円の歌類は『校本拾玉集』（吉川弘文館）、『慈鎮和尚夢想記』は『続天台宗全書』、『源承和歌口伝』は『日本歌学大系』（風間書房）、『山州名跡志』は『新修 京都叢書』（臨川書店）、『兵範記』は『増補 史料大成』（臨川書店）、『庭槐抄』は『新枝群書類従』、『古今集』・『林下集』は『新編国歌大観』（角川書店）、『百鍊抄』は『新訂増補 国史大系』。

註

〔1〕植木朝子「第一章 第四節 和歌の修辭と今様」（『梁塵秘抄とその周縁——今様と和歌・説話・物語の交流——』三省堂・二〇〇一年）また一方、徳大寺実定の同母弟である公衡への慈円の親愛の情は篤く、『拾玉集』には、

同十七日又雪ふかくつもりてありしあした公衡中将もとより

思やれみちさへたえいとしく雪のそこにもしつむ心を

其比身しつみぬることを欺けるころにてかくよめるなるへし

（五四五五）

返し

としの内に春にあふへきやとなればやかても雪の春と見ゆらん

(五四五六)

年のうちにもよろこひありななんと思ふ事ありて、かくいへるなるへし

はたして三位中将に成にけり

とある。文治五年十月十七日、大雪にこと寄せて自身の不遇を訴えていたが、慈円は同年の十二月三十日に三位中将に昇進したことを慶祝する歌をおくった。徳大寺家と慈円とは親交を深めていたのであった。

- [2] 慈円和歌研究会『慈円難波百首全釈』（風間書房・二〇〇九年）には「俗諦の歌。（中略）本百首が成立した建保七年以前の、西山隠棲時代を回顧しての詠か。」（八六ページ）といい、本歌を含めての五首には「真諦・俗諦を合わせた。（中略）反語表現を用いて強調している。」（八九ページ）として「自他の別、善悪の別も本来的にあるわけではなく、その事物自体だけが証し立てることはできない。だから、自他の別、善悪の別も本来的にあるわけではなく、何かに触れた際にその区別が立ち現れる」（九一ページ）とある。

- [3] 石川一「第四章 第七節 慈円と春日社——『春日社法楽百首』二首」（『慈円和歌論考』笠間書院・一九九八年）五三五ページ
- [4] 拙著「第I部 第二章 慈鎮和尚夢想記の方法」（『愚管抄の言語空間』汲古書院・二〇一四年）
- [5] 註〔4〕の同書「第II部 第七章 治承物語と西山の空間」三〇九〜三一〇ページ
- [6] 富倉徳次郎『平家物語全注釈 中巻』（角川書店）三五ページ
- [7] 「第二篇 第三章 「月見」の考察」（『平家物語の形成と受容』汲古書院・二〇〇一年）一四一ページ
- [8] 註〔6〕の同書三五ページ
- [9] 「平家物語「徳大寺実定」説話をめぐって」（『國學院雑誌』第七三巻第五号・一九七二年五月）。
- [10] 註〔6〕の同書三四ページ
- [11] 「第三部 建礼門院説話の考察 七 後徳大寺実定について」（『延慶本平家物語論考』（加藤中道館・一九七九年）四〇二〜四〇五ページ
- [12] 五味文彦「第二部・I・十四 長門阿弥陀寺・西山往生院・鎌倉永福寺——『平家物語』成立の背景」（『中世社会史料論』校倉書房・二〇〇六年）二八二〜二八七ページ
- [13] 大山喬平編『浄土宗西山派と三鈔寺文書』（『京都大学文学部博物館古文書』第九輯・一九九二年）
- [14] 瀧川政次郎「徳大寺實基に就いて」（『国語と国文学』第八巻第一号・一九三一年一月）・多賀宗準「太政大臣徳大寺実基及び左大臣公継―鎌倉時代政治思想の一面」（『論集中世文化史』上 公家武家篇』法蔵館・一九八五年）

- [15] 上山隆『三鈔寺文書』の研究——西山善峰寺往生院における観性——(『大正史学』第二号・一九九一年三月)
- [16] 註(4)の同書「第II部 第七章 治承物語と西山の空間」・村山修一『比叡山史』(東京美術・一九九四年)一八三ページ
- [17] 中西随功「第一部 第二章 證空の浄土教 二 念仏即往生」(『證空浄土教の研究』法蔵館・二〇〇九年)・拙稿『治承物語』の性格——西山と四天王寺——(『日本仏教総合研究』第二二号・二〇一四年五月)
- [18] 「第二章 一 今様の享受と再生 二 今様の表現構造」(『今様のこころとことば——『梁塵秘抄』の世界——』三弥井書店・一九八七年)一七八ページ
- [19] 註(18)の同書「第二章 四 神歌の時空と表現 その二——今様二句神歌・神社歌をめぐって——」二六〇ページ
- [20] 註(4)の同書「第II部 補論 「あそび心」と今様」四一九ページ
- [21] 註(4)の同書「第II部 第八章 治承物語の復元」
- [22] 註(17)の拙稿『治承物語』の性格——西山と四天王寺——と同じ。
- [23] 永池健二「(王城)の内と外——今様・靈驗所歌に見る空間意識——」(『日本歌謡研究』第二七号・一九八八年七月)
- [24] 「今様と京の内外——後白河院期を中心に——」(『日本文学』第四二号・一九九三年七月)
- [25] 松野陽一「林下集について」(『立正女子短期大学研究紀要』第八号・一九六四年一月)
- [26] 宮地崇邦も「徳大寺実定について——平家登場人物の謎——」の論稿で、この事実をもとに「頼朝に長官実定の姿が好ましいものに写ったのはたしかであろう」と指摘している(『國學院雑誌』第八〇巻第一号・一九七四年一月)。
- [27] 野口実は『源氏と板東武士』(吉川弘文館・二〇〇七年)に於いて「景時は弟の朝景とともに、はやくから実定に仕えており、西行が実父の父、公能の家人であったことから知られるように、当時、徳大寺家は都における歌壇の一つの中心をなしていたのである」と論じている(二四七〜四八ページ)。高橋一樹も『東国武士団と鎌倉幕府』(吉川弘文館・二〇一三年)も同趣旨のことを論じている(一九六ページ)。
- [28] 「第三章 3 徳大寺家の周辺」(『中世公家政権の研究』東京大学出版会・一九九八年)
- [29] 馬場光子『梁塵秘抄口伝集 全訳注』(講談社・二〇一〇年)二二二ページ
- [30] 五味文彦『後白河院 王の歌』(山川出版社・二〇一一年)八六〜八九ページ。棚橋光男は『後白河法皇』(講談社・一九九五年)のなかで、「今様という《回路》を通じて、そして河原・六波羅という《場》を通じて、二重に帝王後白河と結びつけたのだ」(二二二ページ)と指摘し、「帝王後白河は、王権と文化(芸能)と漂泊集団と、この三つを紡ぎ合わせる網目を発見していた。(中略) 王権の中世的再生をはかるため(中略) 生命線だったのである」(二二二〜二三ページ)と論じている。
- [31] 遠藤基郎『後白河上皇 中世を招いた奇妙な「暗主」』(山川出版社・二〇一一年)のなかに、「遊興の王権」との標題のもとに「今

様をはじめとする遊興は（中略）時として度をすぎた酔狂」（二二ページ）・「後白河が主催した酔狂な遊興や祝祭は、けっして個人的・私的な趣味にとどまるものではなかった。祝祭の場には、「まなざし」の政治とでもいうべきものが存在したからである」（二〇ページ）として、「後白河が都市空間でのまなざしの政治性を明瞭に意識していたことをものがたっている」（二二ページ）と論じている。

〔32〕拙著「Ⅱ 愚管抄と平家物語（『愚管抄とその前後』和泉書院・一九九三年）一九二〜九四ページ

〔33〕註〔4〕の同書「第Ⅱ部 第八章 治承物語の復元」

〔34〕註〔5〕と同じ。

〔35〕『今様の時代・変容する宮廷芸能』東京大学出版会・二〇〇六年）一七八〜七九ページ。さらに、同書で『中右記』大治五年十一月十五日条の「少将公能歌二今様一、藏人盛定付レ之。歎甚有レ興。人々喚感レ氣肩脱。舞二万歳楽一。」をもとに「今様の名手藤原公能が今様を歌ってその場を大いに盛り上げ、人々は感動のあまり肩脱レぎをして「万歳楽」を舞ったとある。（中略）後白河院が主催した二度の清暑堂御神楽拍子で、これらの今様が歌われているという事実がある。（中略）御神楽本番はもちろんのこと、拍子合とはいえ今様が歌われるということは基本的にはなかった。その中で、後白河院は自らが主催した二度の拍子合の際に、今様を歌わせているのである。」（一九八ページ・二〇〇ページ）として、後白河院にとつての今様とは、その先に神仏の感応や極楽往生を描いていくような信仰的なものとみなしている。

〔付記〕

国際日本文化研究センター共同研究「説話文学と歴史史料の間」（二〇一五年七月四日）での『治承物語』の今様をうたう徳大寺実定の意味」と題した口頭発表の原稿をもとに、まとめた。

〔キーワード〕

今様・壇越・アンビバレンス・徳大寺家・あそび心・往生院・慈円園・王法・東国・別所